慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宋刊新唐書について
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1974
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.11 (1974.) ,p.381- 428
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000011-0381

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋刊新唐書について

尾崎　康

静嘉堂文庫所蔵、陸氏皕宋楼旧蔵の宋版唐書（新唐書）は、北宋嘉祐刊本として夙に著名であった。新唐書は嘉祐五年（一〇六〇）に成立したものであり、その進呈の表とその二日後に杭州で印刷に付すという中書劄子がある。すなわち、この唐書は欧陽修らによって編纂された直後の、いわゆる初版本ということなのであった。

静嘉堂でこの本を手にして、わたくしはこれこそ嘉祐刊本とその重みを痛感したし、同版の金沢文庫本の宰相世系表（梅沢記念館蔵）、さらには長沢規矩也博士が発見、寄進された足利学校本の列伝（足利学校遺蹟図書館蔵）を閲覧するにつけ、いよいよその念を固くした。宋諱欠筆が仁宗の諱の禎字に止まることはもとより、静嘉堂本には、一部に刻工から南宋前期の補刻と断定できる葉があるが、原刻との差異は歴然として、原刻はそれよりかなり古い刊刻とみえるからである。しかも梅沢本と足利本にはまったく補刻がなく、文字はこころもち粗いタッチで美しく刻られ、摺刷もまことによいのである。

北京図書館刊の中国版刻図録では、補修が元代に至る同館蔵の同版本が紹興刻宋元遞修本とされている。すなわち南宋版というのであって、その根拠は直斎書録解題に思溪円覚蔵経の余板で唐書を刊したとあることである。思溪版の刊年も問題のあるところであるが、この図録は、一部の経の巻末に付刻されたいわゆる刻蔵題記の紹興二年をとり、唐書はその数年後の刊行とみたのであろう。

しかし、同図録の解説では、この唐書の刻工を南宋初葉、南宋中葉、元時と三期に分けたうちの第一期に、静嘉堂本の原刻と補刻の両方の刻工を混えている。補修が元代に及ぶあいだに

初期の版面が汚れてその区別がつかなくなり、実は補刻である葉の刻工が、紹興九年臨安府の刊記をもつ同館蔵の文粋や漢官儀などにもあらわれるところから、直斎書録解題の記事と結びついて、両者を一括して紹興刊とみなしたものと思われる。すなわち、この第一期は静嘉堂本を一見すれば当然これを二分すべきことが明らかであり、そのうちの第二、つまり第一次の補修が紹興もしくは南宋前期に行なわれたことは、その刻工で証明されるものであるから、第一期、すなわち原刻はそれよりくりあげてやはり北宋嘉祐となり、以下の補修はこの三分類がほぼそのまま適用されるもので、第一次の補修が思溪版の余板を用いて行われたのであろうと、わたくしは考えたのである。

とはいえ、紹興年間（一一三一～一一六二）にはじめて補修されたとして、その原刊の嘉祐五年まで七〇年余を隔てることには、両者の字様を較べると明らかな相違はあるものの、それほどの年代差をもつものかといささか疑問がおこらないでもなかった。嘉祐五年六月の進書表と中書劄子、仁宗の禎字までの欠画だけでは嘉祐原刊本と断言はできず、やはり刻工で証明しなければならない。しかし原刻刻工は他書になかなかあらわれず、四部叢刊本の景徳伝燈録に数人をみつけても、これにも刊記がなく原本もみられないままに、補刻がはたして紹興年間に行われたかを確認するために、つまり、補刻刻工の名を求めて思溪版の一帖を見たところ、なんとここに原刻刻工がいたのである。そして、王永従一族のいわゆる刻蔵題記に雕経作頭として李孜、李敏が名を連ねるのをはじめとして、この諸経のなかに多数の名をみいだすにいたった。

これによって、直斎書録解題の記事は原刻をさすもので、唐書は南宋前期に思溪円覚蔵経と前後して刊刻されたことになり、しかも、直斎書録解題に呉興に守となっていた宇文時中がこれを行ったとあるが、その知湖州在任の期間が明らかになった。すなわち、静嘉堂文庫、足利学校遺蹟図書館、梅沢記念館、また北京図書館所蔵の、あるいは天禄琳琅書目著録のいわゆる唐書嘉祐刊本は、南宋のごく初期、紹興七年（一一三七）ごろの刊本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北京図書館本の第一次補修は、その刻工がわずかながら原刻刻工とともに思溪版にもみえ、その他の南宋前期刊本にかなりあらわれるところから、原刻からさほど年月を隔てないで、三二年つづいた紹興の末ごろか、つぎの孝宗の代の初めに行われたものと考えられる。

この稿は以上について詳述することを主とするが、関連して現在調査しうるものはもとより、影印本、図録、目録類で知りうる新唐書の宋刊本を一通りとりあげることにする。

なお、南宋の刊刻の時代を区分することはいろいろ問題があるが、叙述上、一応の区分をつけておかねばならないので、ここでは大きく前・中・後の三期に分けることにする。

この稿でも問題になるように、高宗の紹興年間の刊記をもつ刊本にでてくる刻工は、しばしば孝宗の嫌名の慎字を避諱する

刊本にもあらわれるし、徐々に変化は生ずるものの、字様も概して似ているうえに、これらの刻工による刻本を紹興の後半または末で区切る根拠があるものでもない。そして、敦・郭を欠画する刊本とは、字様も、欠画があまり厳格ではなくなる点でも、顕著に異るのである。したがって、慎字までを欠画するものと、それが光宗の惇・敦、寧宗の拡・郭字に至るものとで、前期と中期とすることになる。避諱欠筆が前帝に止まるか、今上に及ぶかはかねてからの問題で、いまだに断定しかねるが、ここでは紹熙（一一九〇～一一九五）の五年間をどちらに含めるかということになり、前者をとれば前期が六三年、後者とすると六八年間にも達する。これはあまりに永すぎるから、刊記があるなどして紹興年間以前の刊であることが明らかな場合は、とくに初期と呼ぶことにする。

中期と後期の区分は、郭と馴との欠画の差になるが、これがまた今上避諱の是非で年代を大きくずらせてしまう。理宗の在位が四一年に及ぶからで、非とすれば中期も七一年に達し、その代り後期が一五年で終る。わたくしはどちらかといえば今上避諱の印象を抱いているが、刊年を明らかにする本の調査が不十分で、これを曖昧にしたまま論を進めざるをえない。ただし、この稿では中・後期の区分はほとんど問題にはならない。

一　新唐書の編纂

旧唐書二〇〇巻は五代の後晋朝で編纂されたが（九四五）、紛乱によって史料が散逸していたために、この事業は苦心をきわめたといわれる。しかし、それだけに唐代三〇〇年（六一八～九〇七）の史料が十分に整わず、また原史料を直接に引用するところが多く、記事も文章も首尾一貫しないとして、とかく不評をかった。したがって宋が統一を達成し、また古文が尊重されるにおよんで、唐史の改訂新修の気運がたかまるのは当然で、嘉祐五年（一〇六〇）にいたって欧陽修・宋祁による新唐書の成立をみる。

この新唐書の成立について、宋史（巻一二仁宗紀四）は

（嘉祐五年七月）戊戌、翰林学士欧陽修上新修唐書。

と記すだけであり、続資治通鑑長編も、右と同じ記事のあとに刊修および編修官に進秩、加職、賜器幣が行われたことを加え（巻一九二）、またそれより先、至和元年（一〇五四）八月戊申に新唐書刊修の命が欧陽修にくだったことを掲げているにすぎない（巻一七六）。しかし、その一応の経緯や編修官の名は玉海（巻四六藝文）、直斎書録解題（巻四）、紹興元年程俱撰の麟台故事（巻三下修纂）に明らかにされており、麟台故事がもっとも詳しい。これらによると、慶暦四年（一〇四四）の賈昌朝の唐書再修の建議、翌五年五月の編修官の任命にはじまった。このメンバーを国史志を引く玉海は王堯臣・張方平・宋祁等とし、麟台故事は曾公亮・趙師民・宋敏求・范鎮・邵必の五人を掲げ、皇祐三年（一〇五一）までに王疇が加わったことを述べている。しかし慶暦四年には着手されず、実際には続資治通鑑

長編にみえるように至和元年八月に再び任命が行われ、刊修官として欧陽修が紀表志を、宋祁が列伝を担当し、これに編修官として范鎮・王疇・宋敏求・呂夏卿・劉羲叟が協力することで編纂にとりかかった。翌二年には中唐あたりまで進んでいたらしいが、唐末の史料が不足して西京内の諸官司の庫の唐五代の奏牘を呂夏卿が調査している。そして嘉祐二年（一〇五七）に曾公亮が提挙編修になり、五年にいたって二二五巻が完成して、七月戊戌、かれの名によってこれを仁宗に上進した。(1)

いわゆる嘉祐刊本では足利学校遺蹟図書館蔵本だけであるが、そのほか南宋中期建安刊本、その元代覆刊本、元大徳建康路儒学刊本、明万暦北監本、さらには寛延の和刻本などには、巻末または巻首に付刻された進呈表に曾公亮ら八人、鏤板頒行の中書劄子に富弼ら八人の官銜がある。進呈表の編修官・刊修・提挙は至和元年任命の欧陽修らの七人と曾公亮とであり、巻頭の上表にもこの名が列せられ、凡そ十有七年にして成るというのも、以上の経緯に一致する。しかし、進呈表の日付は嘉祐五年六月二四日、中書劄子の日付が六月二六日で、ともに宋史などの七月一二日上進に先んじており、新唐書はこれより早く成立し、印刷に付されていたことを示すのである。

二　いわゆる嘉祐刊本

新唐書は成立とともに杭州で刊刻されたが、それは、足利学校遺蹟図書館蔵の宋刊本の巻末に

嘉祐五年六月二十四日
進呈
（提挙編修曾公亮以下　刊修　編修官　八人の官銜一二行）
嘉祐五年六月二十六日准　中書劄子奉
聖旨下杭州鏤板頒行
（富弼以下　校勘　校対　八人の官銜一一行）

とあることで明らかである。(2)

この足利学校本が発見されたのはごく近年のことであるが、この事実は早くから知られ、仁宗の諱を欠画し、字様もやや古体を示す足利本と同版の天禄琳琅本、旧陸氏皕宋楼蔵の静嘉堂本がこれにあたるとして、長く嘉祐刊本と称せられてきた。このいわゆる嘉祐刊本は、天禄琳琅書目に著録されていたものはその後の所在がわからず、いま存在が知られるのは静嘉堂、足利学校遺蹟図書館、梅沢記念館、北京図書館が所蔵する四本である。

しかし、以下に述べるように、これらは南宋の紹興七年ごろの刊本であることが判明した。仁宗までという欠画が厳格なところから、これは嘉祐刊本の覆刻であるかも知れないが、その原刊本でないことはたしかであり、嘉祐刊本は現存しないことになる。

いずれにしてもこれが現存最古の刊本であり、残存の巻数も多いので、百納本二十四史の発刊にあたっては、新唐書にはこの静嘉堂蔵本が底本とされ、欠巻は北京図書館本などで補われ

た。百納本の新唐書についてものちに述べる。

1　静嘉堂文庫蔵本

唐書残本（存一八八巻）　〔南宋紹興七年〕刊〔南宋前期〕修（一部〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本と明万暦二一年抄本をもって補配）　九〇冊

		葉	巻			葉	巻
刊本		410	巻	本		926	巻
年修		770		刊		6	
7期	首末	569		建		603	
		326		中・・・		11	
		121		計		11	
〔興前〕	～	150		宋	半	4	部
〔紹宋〕	～	503		南	本	0	45
南表	～	0	計	巻	大	2	巻
上録	上下	709		11		一	
目	巻	27				031	
		11				1	

改装後補乳白色表紙（二七・九×一七・三センチ）、襯装。首に嘉祐五年六月の曾公亮の上表があるが、進呈および鏤板頒行の中書劄子とその官銜はない。首題は「本紀第一　（抵一一格）　唐書一／（抵三格）　翰林学士兼龍図閣学士朝散大夫給事中知制誥充史館脩　判秘閣臣欧陽修奉／勅撰」。左右双辺（二一・二×一四センチ）、毎半葉一四行、行二四～二五字、注文小字双行三一～三三字。版心白口、上象尾に字数がなく、「唐書本紀(列伝)　（葉数）（刻工名）」と刻し、志は「礼楽志」のように小題名も入れる。補刻葉も同じ。刻工については別に記すが、原刻・補刻とも南宋前期のものと認められる。欠画は、玄眩玹泫炫弦鉉朗珽侹鋌敬儆璥璥憼驚警弘泓殷溵匡境鏡胤炅熲恒暅禎貞摃徵の各字で、原刻葉は仁宗の諱に止っている。補刻葉も僅少の例外を除いて同様で、このことが嘉祐刊本であることの一つの証左とされていた。補刻葉の例外とは、たとえば巻一一七第七・八葉（刻工施沢）の吉頊伝であるが、頊字が神宗の諱とあってその末筆を二〇回にわたって欠いている。この二葉は足利学校本は原刻を存し、これをまったく欠画していない。吉頊の名は本紀にもみえるが、ここもたまたま補刻葉で避諱されている（巻四第一〇葉表・刻工施珣）。百納本を検すると同じような例があり、静嘉堂本が欠巻で北京図書館蔵本が用いられている巻一〇一の第七・八葉は、章彦・章宇という原刻・補刻の刻工名が入っていて、これも蕭遘の伝であるために、遘字をそれぞれ三・一二回と各三画を欠いている。もっとも百納本には文字の加筆修正が多いし、そのつぎの第九葉は補刻で刻工が李時であるが、七字ある遘をまったく欠画しないから、原本に確めないと信用しがたい。現に足利学校本の原刻刻工は王端・王端・呉紹で章彦はなく、むろん欠画してはいないから、章彦の名は誤って入れたとしか思えないのである。やはり百納本の巻一九五第九葉裏に慎字の末画がみえないが、これはおそらく書入れを抹消した折に落したものらしく、原本は欠いていない。そのほか、静嘉堂本の補刻葉には完字を欠画した例がある（巻一一一第九葉裏・刻工朱明）。慎字は頻出するが、欠画の例はない。原刻葉は印面にかなり磨滅のあとがみえ、補修版はきわめて鮮明で、字様にも多少の相違があるので、両者の区別は一見して明瞭である。ただし補刻葉はあまり多くなく、巻によって異る

ものの、本紀・志・列伝は一・二割程度、表にはほとんどない。

一部に朱の句点と勾点、朱引が施され、眉上に墨筆で干支や重要事項の見出し、通鑑との校異、校字などが書入れられている。左に掲げるように諸巻の末に、南宋末の景定五年（一二六四）から咸淳三年（一二六七）にいたる李安詩の点校の識語があり、巻二二五上第一〇葉の補写とともに、この李安詩の筆になるものであろう。

巻　四　景定甲子夏五下七点抹終巻／会稽李安詩識于克斎

一〇　景定甲子八月八日点抹終巻安詩識

二七上　景定甲子八月廿九日点抹終巻安詩識

三〇上　景定甲子九月三日点校終巻安詩識

三五　景定甲子九月五日点抹終巻安詩識

四二　景定甲子重陽日点校終巻安詩識

四七　甲子九月十八日点抹終巻李安詩識

五四　景定甲子九月廿七日点抹終焉安詩識

六〇　景定甲子九月廿八日点抹終焉安詩識

八二　景定甲子十月三日点抹終巻安詩識

九一　景定甲子十月初六日点抹終巻安詩識

一〇八　景定甲子臘月四日点抹終／巻会稽李安詩識

一一五　景定甲子臘月十二日点抹終巻安詩識

一二二　景定甲子歳除日点抹終巻安詩識

一四一　咸淳乙丑臘月九日点抹終巻安詩

一五〇　余以憂患之余不親書冊久矣前之日／母氏小祥連日

一九三　徹覚労倦不可以風兀生／安閑小室点読終巻　咸淳丙寅十二月／二十二日会稽李安詩謹識

二〇〇　咸淳丁卯三月十六日標点終巻会稽李安詩

二〇七　咸淳丁卯三月中七点抹終巻会稽李安詩

二一四　咸淳丁卯三月下五題点終巻会稽李安詩

二一八　咸淳丁卯四月四日点抹／終巻会稽李安詩

二二二下　咸淳丁卯四月癸酉点抹終巻会稽李安詩

二二五下　咸淳丁卯四月十九日点抹終巻李安詩識

考証不敢輒／下雌黄姑俟善本当更是正会稽李安／詩謹識是日陰雨書于／六友堂

李安詩　字は伯之、号は克斎、会稽の人　と識語およびつぎの印記にみえる以上に知るところはないが、宋末に三年かかってこの書を精読したということである。儀顧堂題跋巻二には「安詩履仕無攷」ながら、嘉定壬申（五年）刊の大事記の末に、「同校正郷貢免解進士充府学直学李安詩」の銜名があり、景定五年まで五三年、まさにその人であるという。この刊・校記は皕宋楼蔵書志巻二〇に著録されるが、原本は残存せず、中央図書館（北平）蔵の大事記通釈存二巻一冊（欠巻一）には刊・校記がない。

さらに、巻末には明の永楽八年（一四一〇）の銭塘梁某の、巻三末に万暦二一年（一五九三）の充菴居士の識語がある。

此書逮今一百四十余年来自杭／之桂翁年逾八袤見嚢於余／余以嚢橐暫乏託之友人宋節貫／来旬日始償価書以示吾子孫

当謹保之毋忽時／大明永楽八年歳次庚寅夏五月望日錢唐
（下欠）／（印）
此宋板唐書為錢塘李氏蔵本予為其字画無訛標抹詳好／珍収
有年第中多残欠玆以燕間抄録装繕俾成完璧書示／子孫使知
先賢之嗜学与予之苦心尚其宝護敷云時／万暦癸巳重九充菴
居士識（印）

後者によって、一五巻余におよぶ補写が万暦に行われたことが示されている。これは行款、字様ともに原本を模した端正な抄写であり、巻七一のごく一部の葉の版心の下象尾に、「監生汪鑑」および原刻と同じ「王益」の刻工名を録していて、明代にいたる遞修本にもとづいたものかと思わせるふしがある。この補写巻の冊首にも清順治四年（一六四七）進士の季振宜の蔵書印が捺されているから、それより半世紀早い充菴居士の抄録装繕がこれにあたるとみてよかろう。ただし、錢塘梁氏、充菴居士ともに未詳である。そのほかにまだ欠巻があるが、存巻にも稀に欠葉がある。巻七五下宰相世系表第一五～二九・三八葉の計一六葉は原欠で、そのまま版心に通しの葉数がつけられている。百納本二十四史の新唐書ではこの欠葉を別本で補い、葉数も訂してある。また、原刻葉は判読に苦しむほど破損しているわけではないから、版面の一角を修補したような跡はみうけられないが、補修に際して誤字などの原板のごく一部を修正したことはあると思われる。巻七一下第五葉は原刻葉であり、梅沢記念館蔵の原刻本と同版であって、「盛」（錢盛）の刻工名も同じであるが、裏の第一〇行の末字が梅沢本は墨釘としているのを、静嘉堂本はこれをおこして「居」字を入れている。居字は次行初にもあるから、初刻で誤って重複させたのをその校正の際に訂したものであろうが、補修にあたって無用の誤りをくりかえしたということである。なお、百納本はこの行全体に加筆修正して無難に収めている。なお、従来の書目等には巻一八一～・八九が存在するように書かれているが、この九巻は現存せず、装訂の状態と冊数からみて、皕宋楼以来欠巻であったらしいし、百納本も他本を用いている。

蔵印は「李安詩／伯之克／斎蔵書」、「錢唐梁／氏珍蔵／書画記」「子々孫々／永用之」（陰）、「樹蕙／堂子／孫保之」（陰）「媒谷／蔵書」（陰）、「季振宜／蔵書」「季印／振宜」「滄／葦」、「汪印／士鐘」（陰）「閻源／真賞」、「帰安陸／樹声叔／桐之印」（陰）の各種。

原刻葉の刻工にはつぎのものがいる。

刻工名は原則として姓名のあるものを掲げ、一字のものはとらない。右肩の数字は画数。印刷上略字を用いた場合も旧体の画数を数え、その順に排列した。

3六通　4毛易　王介　王夯　王成　王昌　王真
王益　王春　王祖　王端　王震　史復　6江通
7余俊　呉邵　呉紹　呉諧　李十娘　李攸　李孜
李敏　李順　沈草　8周志　周富　周祥　周詳
周畢　周煉　10徐氏　11章中　章忠　章立　章彦
莫中　莫忠　陸通　12華元　雇中　雇仲　13董三六

董四三　董安　董昜　虞集　15蔡挙　蔣済　16衛祥
銭盛　銭暘　17謝氏　20厳先
6先　7李　沈　8周　昕　明　11敏　章　13董　18挙

これらは他書にあまりみかけない刻工であるが、長沢規矩也氏の宋刊本刻工名表初稿（書誌学二―二・一九三四年）、宋刊本刻工名表（一）（書誌学新二〇・一九七〇年）などを手がかりに拾うと、わずかであるが左の諸書に同名の刻工が見いだされる。

章中・章立・章彦・董昜の四人が、四部叢刊本の景徳伝燈録三〇巻一〇冊の大半を刻している。原本は当時鉄琴銅剣楼蔵の宋刊本であって、北京図書館現蔵と思われる。仁宗の禎・貞・徴をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、影印本による判断ながら字様も似て、唐書にごく近い時期の刊本とみるのが自然であろう。そしてその刊年は紹興四年と思われるのであるが、いまはまだそれを確定できない。(3)

これにたいして、僅少の例にすぎないが、南宋前期の刊本と認められるものに、同名の刻工がいることがある。静嘉堂文庫と宮内庁書陵部蔵、それに中国版刻図録所載の外台秘要方は南宋前期の刊本と推定されるが、この刻工に王介・王成・江通・呉邵がいて、字様も唐書に似ている。(4) 紹興中明州の刊とされる六臣註文選の足利学校遺蹟図書館蔵本に、江通が刻工となっている。(5) いわゆる眉山七史本の宋書・梁書・陳書・北斉書の原刻葉に王昌・王祖の、魏書に王真の名がある。眉山七史についてはあらためて考証したいが、南宋二代孝宗の慎字までを避諱していて、南宋前期の杭州方面の刊本とみて誤りはなかろう。(6) ほぼ同じころの刊と思われる史記（静嘉堂蔵本・その淳熙三年の序跋は補写）には章中がいる。(7) また、中国版刻図録によれば、紹興九年（一一三九）臨安府開雕の文粋の刻工に王成があげられている。(8) また、金子和正氏によれば、天理図書館蔵の南宋覆宋刊本の通典残本存一六九巻三五冊に王益・虞集（天理図書館蔵宋刊本刻工名表・書誌学新一八号・一九七〇年）、阿部隆一氏の示教によれば、中央図書館（北平）蔵の光宗以後刊とされる蘇文定公文集残本存一八巻後集一一巻三集五巻応詔集一二巻一六冊に王成・王祖、南宋前期刊と思われる四部叢刊本の龍龕手鑑巻二に王成・呉邵の名がみえる。

南宋中期以降の刊本にも同名はあって、開禧二年（一二〇六）跋刊の石林奏議（静嘉堂蔵本）に王震、後期の宝祐五年（一二五七）刊の通鑑紀事本末（静嘉堂蔵本）に王介・王春、そして咸淳臨安志（静嘉堂蔵本）に王春・王真の名がみえる。

これらについては、補刻刻工とあわせてこの後に一考するが、南宋中・後期の五例四人は同姓同名などで問題にはなるまいとして、焦点は、唐書が、景徳伝燈録とともに従来からいわれてきたように北宋嘉祐の刊本であるのか、あるいは一、二名づつながら刻工の一致する刊本が存在する南宋前期の刊刻であるか、ということになろう。

唐書の補刻葉の刻工は、つぎのとおりである。

4王昇　王祚　王端　5史郁　6朱明　7呂昕　李文

李崧　沈珍　9施珣　施沢　胡寔　10孫容　徐用
11張通　張詵　章宇　章受　章容　莫中　莫允
陳説　13董昕　董明　董暉　董暘　14趙秀　15蔡通
16銭端　18戴全　02厳詵　21顧諲

南宋紹興中両淮江東転運司刊の二史についても稿を改めたいと思っているが、この史記（宝礼堂宋本書録）に右のうちの朱明が、漢書（静嘉堂等蔵本）に李文・陳説・章宇・陳説・董明・董昕・董暉・蔡通が、後漢書（中央図書館等蔵本）にまた朱明が、それぞれ刻工となっている。そのほかにも

周易注疏（越刊八行本・足利学校遺蹟図書館蔵本）　朱明
史記（〔淳熙〕刊・静嘉堂蔵本）　章宇　陳説　董昕　胡寔
外台秘要方（〔南宋前期〕刊・静嘉堂蔵本）　朱明　董昕　董明
漢官儀（紹興九年臨安府刊・北京図書館蔵）　董明
文粋（紹興九年臨安府刊・北京図書館蔵）　董明　蔡通

などが見出される。

これらによって、補刻が南宋前期に行なわれたことに疑いの余地はないが、これを決定的なものとし、さらに原刻との関係を示すのが四部叢刊本の北山小集である。北山小集四〇巻、宋程俱撰。四部叢刊続編に収められたのは江安傅氏雙鑑楼蔵本で、雙鑑楼蔵書続記巻下に著録、黄丕烈、汪士鐘らの蔵した宋刊本を張蓉鏡が影写したものであるという。「琴川張氏小／瑯環清閟／精鈔秘帙」など、実に五〇余種の印が捺されている。現在は、北京図書館善本書目巻六に

北山小集四十巻　宋程俱撰　清道光七年張蓉鏡家抄本　張金吾、邵淵耀、方若蘅、柳瀛跋　十二冊

とあるものであろう。一方、黄氏旧蔵本は、百宋一廛書録・百宋一廛賦注によれば、四〇巻、毎半葉一〇行、毎行二〇字、紙背は宋の乾道六年（一一七〇）の官司簿帳で、湖州の諸官廨の印があったと伝えられる。張氏の書写も同じく一〇行・二〇字、模写ではないがかなり忠実に行ったものらしく、版心が大黒口の印刷罫紙を用いたとみえてこの題は略されているものの、下象尾に刻工名は記されている。国立中央図書館宋本図録図一四三所掲の同館蔵零本の巻二四首半葉の書影と較べると、行款も刻工名も一致し、その解題に列挙された刻工はすべてこのなかにいる。中央図書館蔵本は存巻二四～二七の一冊で、左右双辺（二一・一×一七・二公分）、一〇行・二〇字、版心白口、紙背はやはり乾道六年公牘紙印とあり、「汪印士鐘」「閬源真賞」、「逆圃収蔵」の蔵印をもつという。汪士鐘の旧蔵本ではあるが、黄丕烈の印記は掲げられておらず、黄氏旧蔵本の端本であるかはわからない。張氏写本によると、この北山小集の刻工は

4王昌　王明　王栄　6朱明*　7宋明　李松　李崧*
李林　沈秀　沈祚　沈祥　9施詢*　施沢*　胡寔*
胡実　10徐松　徐栄　師詢　高彦　11陳明　陳挙
章宇*　章宗*　章彦*　章容*　12童祈　13董宇*　董沂
董昕　董明*　董暉*　15滕昱　16銭寔　銭実

であるが、このうち。印を付けたものが唐書の原刻の、*印のものが補刻の刻工と同名である。そして、文中、孝宗の諱・嫌

名の脅・慎の両字は避けて、「犯御名」「御名」と小字で書いており、王昌・章彦も含めて、右の大半の刻工が担当した葉にそれが行われている。すなわち、この原本と中央図書館蔵本は、南宋二代の孝宗の代（隆興・乾道・淳熙、一一六三～一一八九）の刊本であり、かれらはそのころ活躍していた刻工である。北山小集からいえば三三人のうち一一人、唐書補刻からなら三二人中一一人、つまり相互に三分の一を同じ刻工が占めるのであるから、唐書の補刻もこのころに行なわれたことが明らかである。また、わずか二人ながら、原刻刻工が当時まだ存命していたということも着目しておくべきであろう。

なお、嘉定三年跋刊の中興館閣録（中央図書館蔵）に、章宇という刻工が寧宗の諱の拡字を「今上御名」と雕っているが（巻一〇第三葉）[12]、これは同名の別人であろう。章宇は、眉山七史の補刻など、南宋中期から後期ごろの刊本にもときにみられる名である。

以上によって、唐書の補刻が南宋前期に行われたことはほとんど確定し、外台秘要方や北山小集には原刻、補刻の双方の刻工があらわれて、両者が近接していることをほのめかしたが、まだ例が少くて原刻も南宋初頭とは決めにくかった。ところで、直斎書録解題巻四に

五代史纂誤五巻（按宋史藝文志作三巻）雑録一巻

呉縝撰。字文時中守呉興、以郡庠有二史板、遂取二書刻之、後皆取入国子監。初郡人思溪王氏刻蔵経、有余板、以刊二史、寘郡庠。中興、監書多闕、遂取其板以往、今監本是也。

とある。巻四は正史類であるから、史記一百三十巻にはじまって、新唐書二百二十五巻、五代史一百五十巻、新五代史七十四巻を含む歴朝史が列挙されていて、新五代史から五代史纂誤の間に一一書が挾まれているから、二史というのが新唐書と五代史記を指すと直ちには理解しにくいところもあるが、王国維は両浙古刊本考巻下に、この記事を引いて新唐書と五代史記を湖州府刊板とした（海甯王忠慤公遺書二集）。中国版刻図録もこれに拠って、百納本の新唐書で静嘉堂本の欠巻の補配に用いた同版後修本を、嘉祐刊とせず「宋紹興刻宋元遞修本　呉興」としている（図版六六、解題一八ページ）。

そこで「郡人思溪王氏刻蔵経」、すなわち思溪円覚蔵経についてその一部を調査したところ、全蔵のわずか一割ほどの約五〇〇巻のうちに、唐書の原刻と同じ刻工が一七人も出現するにいたり、二人であるが補刻の刻工にも一致するものがでた。次に述べるように思溪版は紹興二年前後の雕蔵であるから、直斎書録解題の記事はこの唐書を指すことになり、唐書は南宋紹興年間のかなり初めのころに刊行され、さして時期を経ないで補修されたことが明らかになったわけである。

湖州思溪円覚禅院の大蔵経は、南宋初期に、天字函の大般若波羅蜜多経から合字函の大般涅槃経まで五四八函、宋の元偉撰の湖州円覚禅院新雕大蔵経律論等目録二巻によれば五八二四巻

が刊行されたものである。函・巻数などにやや相違があるものの、その開板の事情については、一部の経の巻末にある左の二種の刊語にほぼ語られている。(13)

大宋国両浙道湖州帰安県松亭郷思溪居住左武大夫密州観察使致仕王　永従同妻恭人厳　氏弟忠翊郎　永賜妻顧　氏姪武功郎　沖允妻卜氏従義郎　沖彦妻陳　氏男迪功郎　沖元妻莫　氏保義郎　沖和妻呂　氏并家眷等捐捨家財命工開鏤大蔵経板伍伯伍拾函永遠印造流通所　鳩善利恭為祝延

今上皇帝聖躬万歳利及一切有情紹興二年四月日謹題

雕経作頭李　孜李　敏　印経作頭金　紹

掌経沙門　覚清　幹雕経沙門　法祖

対経沙門　仲謙　行堅

対経沙門　静仁　慧覚大師　道融　賜紫　修敏

都対証湖州覚悟教院住伝天台教真悟大師　宗鑑

都縁平江府大慈院住持管内掌法伝教説法大師　浄梵

都勧縁住持円覚禅院伝法慈受禅師　懐深

大宋国両浙路湖州帰安県松亭郷思村居住左武大夫密州観察使致仕王　永従同妻恭人厳　氏弟忠翊郎　永賜妻　顧氏姪武功郎　仲允妻卜氏従義郎　沖彦妻陳氏男迪功郎沖元妻莫氏　保義郎　沖和妻呂　氏与家眷等恭為祝延

今上皇帝聖躬万歳利楽法界　一切有情謹発誠心

捐捨家財開鏤大蔵経板惣伍伯伍拾函永遠印造流通紹興二年四月　日謹題

雕経作頭李孜　李敏　印経作頭　密栄

掌経沙門　法己

対経沙門　仲謙　行堅　幹雕経沙門　法祖

対経慈覚大師静仁　慧覚大師道融　賜紫　修敏

都対証湖州覚悟教院住持伝天台祖教真悟大師　宗鑑

勧縁平江府大慈院住持管内掌法伝天台教説法大師　浄梵

勧縁住持円覚禅院伝法沙門　懐深

これらによって、思溪円覚蔵経は、湖州思溪の王氏一族の喜捨により、浄梵、懐深らの高僧が勧縁、都勧縁となって、円覚禅院で開板されたことが明らかであるが、刊語の紹興二年（一一三二）は、その着手の年代か、完成か、あるいはその前後にわたって行なわれたものか、五四八〇巻にのぼる大蔵だけにその時期がなかなか確定しにくい。

この点について小川貫弌氏は、円覚禅院が北宋の宣和中（一一一九～一一二五）に王永従、永賜兄弟によって創建されたと嘉泰年間（一二〇一～一二〇四）談鑰撰の呉興志にあること、菩提行経巻一末に王永従の、解脱道論巻一末に姪の王沖允の、ともに北宋末年の靖康元年（一一二六）に書写開板したという刊語があること、この造蔵事業の中心である勧縁僧浄梵が建炎二年（一一二八）に、都勧縁僧の懐深が紹興二年（一一三二）に示寂していることなどから、北宋の末期から始められて、紹

興二年をさほど過ぎない時期に完成されたと推定されている（註13所掲二論文）。

氏の説に従えば、開板に前後約一〇年を要したということであろうが、同じときに福州開元寺で行われていた開元寺版は政和二～紹興二一年（一一一二～一一五一）の四〇年間、その前の福州東禅寺本が元豊三～政和二年（一〇八〇～一一一二）の三三年間に及んだのに較べると、思溪版はやや巻数が少いとはいえ、いかにも短時日の事業と訝かられる。また、思溪版の一蔵が完存しているところはなく、東禅開元寺版はともかく、渡来の当初から磧砂版や嘉定、淳祐などの刊記をもつ南宋中・後期の刊経も混在しているというから、開板の年代を限定することはなかなかむつかしい。

しかも、各経の字様にきわめて変化が多く、紹興二年の刊語の一葉はまさに紹興の風を思わせるが、それよりかなり固いものや、やや大字で字間、行間がつまりぎみのもの、右上りでいささか行書の体をみせるものなどがあり、個々に一見したところでは南宋初期刊とは思いにくい面も少くない。この端本は、しばしば宋末刊本ともいわれていたのである。

しかし、版下の書手が王永従をはじめとするさまざまな人たちであったし、刻工の個人差に加えて、同一人の刻工にも粗略な箇所があるなどして、字様は必ずしも一定しないが、全蔵の大半は平均した調子をもっていて、しかもその刻工名がたがいに共通しあっている。そして、そのなかに紹興二年の刊語の二葉も含まれるのであるから、一部に補刻、追雕、または別版の混入があるにしても、思溪版は紹興のごく初年に刊行されたとみるのが妥当であろう。王沖允書の解脱道論は背字函、王永従による菩提行経は槐字函に属し、小野玄妙氏が比丘覚元が靖康の変に発憤して血書したといわれる阿毘達摩倶舎釈論巻二一は守字函、尼妙悟大師浄覚による月連所問経・外道問大乗我義経（二経同巻）は卿字函と、いずれも全蔵のうちはるかに後方の部に属する。大蔵の印行は当然計画的に行われ、必ずしも天地……の順の通りの必要はなかったかもしれないが、全体としては千字文号の前後がその順序となったであろうから、これらの諸経の版下が北宋最末に書かれていたことは、開板事業の進行がかなり早かったことをものがたるものであると考えられる。

そして、直斎書録解題の記事によって、知湖州の宇文時中がこの思溪版の余板で唐書を刊刻したとなると、つぎに述べるように紹興六年八月の宇文時中の知湖州就任のころには、思溪版もひとまず完成していたことになろう。小川氏の所論は正鵠を得ていると思われる。

思溪版大蔵は鎌倉時代以来、幾部か舶載されたらしく、いまも岐阜郡上長滝寺、愛知知多岩屋寺、川越喜多院、南禅寺、増上寺、中尊寺等に蔵せられ、その一部については文化財保護委員会、小野玄妙、小川貫弌氏らによって報告されている。いまはこれらにもとづき、大谷大学図書館蔵の一部、大東急記念文庫蔵経などを調べさせていただいたが、とうてい一蔵五四八〇

巻のすべてには手が及ばず、とりあえず必要な範囲ということでほぼその一割にとどめざるをえなかった。

思溪版は、大半は表紙を失い、または改装されているが、原装を残すものも少くない。原装は、黄土色の表紙が左右に延びて裏表紙を包み、合わせた側を上とする帖装に仕立てられている（約三〇×一〇・五センチ）。天地単辺（二四～二五センチ）、毎折無界六行、毎行一七字、毎紙五折。首に経名、巻次を題し、下方に函号の千字文、次行に数字を抵して撰・訳者名を記す。その前、つまり各紙とも本文の右端に丁合せのための「（千字文函号）（題名）（葉数）（刻工名）」が刻されて、これが継目の内側に隠れるようになっており、また巻末には各巻ごとに音釈がついているが、この二点が思溪版の特徴である。だいたい一〇帖ごとに一函とし、これに千字文号がつけられている。なお、欠画はきわめて稀に敬字にみられるほかは、ほとんどされていない。

刻工名が継目の糊付けされたところにあってみにくいが、主に大谷大学図書館蔵の思溪版のうちの約五〇〇帖からつぎのものを検出しえた。

2丁禾　丁寧　3万→萬　于成　于迪　大王昌　4中立
公禾（翁和）　毛道　王用　王成　王宗　王昌
王迪　王琢　王政　王桓　王祖　王益　王真
王道　王園　王栄　王睿　王顕　5付先　史
6印志　印祥　吉彦　朱乙　朱五　朱林　朱富
朱集　朱華　朱端　朱栄　7何言　何忠　助祥
呉申　呉安　宋佖　宋庠　李仲　李妙　李攸
李玘　李茂　李恭　李翊　李詢　李謀　杜済
沈二　沈有　沈昇　沈益　沈端　8周育　周宣
周唐　周富　周琦　官石　芦→盧　金二　金義
金栄　青一　9兪成　兪原　姚珍　思徹　施中
施宏　施明　施門　洪先　洪吉　胡明　胡昇
范瑞　范瑞　10孫立　孫遵　徐氏　徐立　徐昇
徐昊　徐秀　徐阿四　徐珎　徐高　徐庸　徐華
徐貴　徐雅　徐義　徐顔　馬成　馬宗　馬宗顔
馬青　馬珎　馬寿　高杞　高起　11崔林　常秀
張宣　張浩　張海　張聚　張錫　章浩　章珎
章祥　章敏　許亮　陳世　陳出　陳立　陳全
陳玘　陳庚　陳明　陳昇　陳亮　陳哲　陳浩
陳軒　陳紹　陳景　陳琪（其）　陳詔　陳寧　陳璿
魚乙郎　魚大宗　魚大唐　魚大娘　魚母唐三娘　魚李　魚宗
魚宗亮　魚念六　魚保奴　12屠有　恵祥　湯立　湯成
盛立　童済　華元　華奕　馮成　馮辛　黄六
黄廿六　黄廿八　黄元　黄常　黄俊　黄祥　黄覚
13楊亮　楊彦　楊茂　楊通　楊寔　楊贇　萬澥
葉由　葉印　葉宗　葛方　葛古　葛璋　董羽
董明　董奇　董珎　董祥　董暘　董済　虞典
虞集　虞黄　虞広　14嘉謀　翟完　裴忠　裴顔

趙宗　趙昌　15蔡超　蔣成　蔣諤　鄭昌　16盧典
盧震　衛立　衛祥　賴安　錢明　錢晞　錢竦
錢暘　17薛昌　18顔宣　20厳氏　厳申　厳先　厳志
厳昌　厳信　厳粛　王震

このうち、。印のついた一五人は唐書原刻、＊印の二人は唐書補刻の刻工と同名である。かれらの名はそれぞれ全蔵の各所に散らばって数回から数十回にわたってあらわれ、ごく一部の箇所に偏在するということはない。

実際にみずから刻した例はないが、雕経作頭としてこれを指揮したと紹興二年四月の刊語にみえる李孜と李敏も、唐書原刻には手をくだしている。また、王昌は一部には大王昌と自署している。かれらはこのときすでに刻工仲間では長老級であったのであろうが、それが唐書には刻工となっているのであるから、両者はほとんど時を隔てずに雕印されたものであり、直斎書録解題の記事が納得のゆくものとなる。なお、註に掲げた南宋前期刊の諸書の刻工表と対照すると、これら思溪版の刻工のうち、紹興九年刊の毛詩正義・漢官儀・文粋の刻工と一致するものが五人、同一八年刊の花間集に二人、両淮江東転運司刊三史に八人、外台秘要方に七人とあって、たがいに密接な関係をうかがわせる。

ともかく、北宋末から紹興初年にかけて思溪王氏が大蔵経を刊刻したとき、多数の版木が余ったので、呉興に赴任した宇文時中がこれを用いて新唐書と五代史記を刊行したというのは、疑いの余地のないものとなった。唐書には三二〇〇枚以上、五代史記を含めると四〇〇〇枚もの版木を要したのであろうが、大蔵経の版木は一〇万枚にも及ぼうというから、よほどの量が準備されていたものであろうか。

それはさておき、この唐書の刊年を、中国版刻図録の編輯に加わったかと思われる宿白氏は紹興三年とされるが、(14)これは思溪版の刊語の紹興二年の翌年にしたにすぎまい。それより、宇文時中の呉興赴任は、建炎以来繫年要録によれば、かれが紹興六年八月丙辰から八年正月甲午まで知湖州となっていることに(15)あたると考えられる。湖州府は呉興にあった。思溪版の余板をもって新唐書と五代史で刻刊されたのは、まさにこの間のことである。この在任期間では、それもおそらくは紹興七年と限定してよいであろう。

このとき同時に雕版された新五代史には、中央図書館所蔵本が相当すると思われるふしがある。刻工に思溪版・唐書原刻と同じ華元と、思溪版にいる付先の名がみえるからである。しかし、阿部隆一氏の調査によると、この五代史記は南宋初期の刊本であるが、両名が雕った葉は南宋前期ないし中期の補刻であるといわれ、問題はいささか微妙になってくる。

五代史記七四巻　宋欧陽修撰　宋徐無党注　〔南宋初期〕刊
〔宋〕修（巻三四～四一・四九・五〇・五五～五七補写）
一八冊　　中央図書館蔵

首の陳師錫の序と目録の前半は補写。「五代史記巻第一／（抵

一〇格）　欧陽　修　撰／（抵一一格）　徐　無党　注／梁本紀第一」と題するのは、小題を上に、大題を下にし、また撰者名に官爵を冠した唐書とは違いがある。左右双辺（一六・八×一一センチ）、有界、毎半葉一二行、毎行二一～二四字、注文小字双行二四～二七字。版心白口、「史本紀(伝)幾（葉数）（刻工名）」、単魚尾。原刻の刻工は、郎和・屠適のほか、中・壬・王・用・亨・杞・汴・玘・言・周・孟・忠・信・胡・恭・連・郎・梁・華・陳・適・機など単字のものであり、補刻も、付先・華元・安上のほかは、上・下・万・元・公・付・尓・立・全・先・何・孟・宗・奇・徐・夏・連・華・貴・黄・源・董・蔣と単字で、原刻と共通するものも少くない。数量からいえば補刻葉が多いが、両者の年代差はさほどでなく、かりに唐書と同じ紹興七年の刊として、当時の刻工の付先や華元が補刻の方に加わることも無理ではないという。単字の刻工名は南宋初期には比較的少いものの、思溪版でも巻帙によっては珍しくないが、いささか唐書との相違点がめだち、同期の刊と断定するにはなお躊躇せざるをえない。この本は日本訪書志著録、「古家館」(陰)、「東宮文庫」印がある。なお、蔵園羣書題記巻一　北宋本五代史記跋　にいう残本(巻一～一二)は、同版のようでもあるが、双魚尾で字数を刻し、刻工名も元人のものらしい。

そしてまた、思溪円覚蔵経はこのときまでに完成していたことになる。さらに、前述の景徳伝燈録紹興四年釈思鑒刊本というのは、やはり章中ら唐書と同じ四人の刻工が主に雕った四部叢刊本の底本の方であって、その旨を述べた劉棐の後序は、もともとこの本のために書かれたものが、引きつづいてつぎの唐書補刻と同じころの南宋前期刊の一五行本にも掲げられ、いまは前者に失われて後者に残っているところから、北京図書館善本書目のように誤解されたものと推察されるのである。

なお、北京図書館に、鉄琴銅劍楼旧蔵のころ百納本二十四史の旧唐書に影印された、紹興中両浙東路茶塩司刊の唐書残本六九巻三二冊がある。紹興刊新唐書と同じく一四行、二五字本である。ほぼ各巻末に

右文林郎充両浙東路提挙茶塩司幹辦公事霍文昭校勘
左従政郎紹興府録事参軍張嘉賓校勘
左奉議郎充紹興府府学教授朱倬校正
右文林郎充両浙東路提挙茶塩司幹辦公事蘇之勤校勘
右文林郎充浙東路茶塩司幹辦公事蘇之勤校正
左従政郎紹興府録事参軍徐俊卿校勘

などの校勘校正の銜名があり、中国版刻図録（図版七三）の考証によれば、朱倬が教授になったのが紹興初年で（宋史巻三七二朱倬伝）、そのころの刊本と推定されている。嘉定一四年創設といわれる「紹興府鎮／越堂官書」の大型印もみえる。百納本によって検すると、この旧唐書に、新唐書原刻刻工と同じ王介・王成・王昌・江通・呉邵の五人と補刻の朱明がおり、また思溪版と共通するもの五人、紹興九年紹興府刊の毛詩正義と九人、外台秘要方と実に二八人、両淮江東転運司刊三史と五人、

眉山七史と三人を数える。宋諱欠筆は構字までとされており、百納本でも構・慤・雛・勾字を欠いたのが認められる。両唐書が、ごく近接した時期に紹興府と湖州府で刊印されたということである。

これらの諸書を彫った刻工は、思溪版がいまのところ一二〇人たらず、両唐書が残本であるが、旧唐書が九四人、新唐書が四〇人ほどになる。思溪版は調査が一部にすぎず、両唐書もまだ増加するとしても、だいたい出揃ったようでそれほどの数にも及ぶまいから、当時、臨安府の周辺に二、三百人の刻工がいて精力的に活動したものと推定される。王・朱・沈・李・周・金・施・徐・馬・張・章・陳・魚・黄・楊・葛・葉・董・虞・銭・厳などに同姓のものが多く、董三六・董四三のような兄弟らしいものや、徐氏・謝氏・李十娘・魚大娘・魚母唐三娘のような婦人の名もみえて、これが家業化していることを思わせる。同姓のものが多いことは、とくに時代がずれて同名異人がでやすいことでもあるから、刻工名の対比には注意を要する。

一方、唐書の補刻刻工には、原刻より早い思溪円覚蔵経の雕蔵に従事した董明と董暘がいた。とりわけ董明は思溪版にも随所に頻繁にあらわれて活躍し、そのあと紹興三年両浙東路茶塩司公使庫刊の資治通鑑、同九年の文粋と漢官儀[15]、外台秘要方の雕版にあいついで参加している。かれらが紹興二年にまだ若年であったにしても、唐書の原刻と第一次の補修はその一代のうちに行なわれたわけである。原刻が紹興七年としてその末年まで二五年、補刻の年代もその前後と推定して大過あるまい。外台秘要方や北山小集に双方に共通する刻工の名がみえるのも、むしろ当然のことである。

2　天禄琳琅書目著録本

欽定天禄琳琅書目巻二宋版史部に「唐書十函一百冊」が著録されるが、これは全二二五巻の首尾完具のようで、首の曾公亮の進書表、尾の進呈と鏤板頒行の官銜も附刻されていたという。「宋本」「滄／葦」「季振宜／蔵書」「御史／振宜／之印」、「乾／学」「徐／健菴」の蔵書印があって、清初に季振宜、徐乾学が所有したことを示し、季氏のもとには現静嘉堂蔵本と同時に存在したこともありうるとする。この天禄琳琅書目著録本は完本らしいし、静嘉堂本には徐氏の印がなく、また静嘉堂本にない「宋本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺されているから、両本が別本であることは明らかであるが、一方、巻一〇〇・一〇一（列伝二五・二六）、一三一・一三二（列伝五六・五七）の四巻には、静嘉堂本とおなじ李安詩や銭唐梁氏などの印記があるという。

すなわち「李安詩／伯之克／斎蔵書」印が巻一〇〇・一〇一・一三一・一三二に、「銭唐梁／氏珍蔵／書画記」「子〻孫〻／永用之」（白文）印が巻一〇一・一三二に、「梅谷／図書」「樹徳／堂子／孫保之」（白文）印が巻一〇一・一三二にあるとされる。静嘉堂本は巻一〇〇・一三一・一三二が補写、巻一〇一が建刊本補配といずれも原本を欠いており、静嘉堂本のこ

れらの印記の所在巻次を通してみると、この四巻の位置はほぼ均衡をえている。二巻づつ続けて捺されているのは、静嘉堂本もほとんどがそうであるが、ちょうど改冊された箇所にあたり、前巻の尾、後巻の首にあったのであろう。梅・図・徳などの文字に疑いがあり、李安詩の識語について記載がないにしても、すくなくともこの四巻は静嘉堂本の僚巻かと想像される。他に無印の巻も含まれていたであろうが、それらを除く大半の巻も、右の四巻などと異版であるとは述べられていないこと、巻末に進呈および中書劄子の官銜を具備することを考えあわせると、おそらく同版、つまりいわゆる嘉祐刊本であったのではあるまいか。ただし、静嘉堂本の補写は明代であるから、李安詩旧蔵本が季振宜のところで分れたものではない。なお、天禄本の紙背には「武侯之裔」の篆文紅印があり、宣城諸葛氏に関係のある造紙家の印記かと考えられている。

3　足利学校遺蹟図書館蔵本

唐書残本（存巻七六～七九・九一～一三二・一四四～一七二　一九二～二二五）　〔南宋紹興七年〕刊　二二冊

列伝巻一～一五〇のうちの存一〇九巻である。江戸時代の改装空押亀甲文繋桐文表紙（二一・二×一四・一センチ）。毎半葉一四行、行二五字。版心は虫損の甚しいものも多いが、白口、「唐書列伝幾（葉数）（刻工名）」、上象尾に字数はない。刻工は、

4 六通　毛益　王介　王夲　王成　王昌　王真
王益　王祖　王端　王震　5 史復　7 呉紹　呉諸
李攸　李孜　李敏　沈章　8 周志　周富　周畢
周燁　11 章中　章立　章彦　莫中　莫仲　12 華元
雇仲　13 董昜　虞集　16 衛祥　銭盛　20 厳先

と、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけでなく、たとえば巻九一についていえば、その第三葉は静嘉堂本に刻工名なしのが足利本は李攸、四葉の胡寔が李攸、六葉の呂昕が董昜というように、静嘉堂本の補刻葉の南宋初期の刻工がすべて原刻刻工に代っている。すなわち、補刻は一葉も混っておらず、本紀・志はすべて欠くものの、摺刷もきれいでみごとな早印の原刻本である。これをはじめは嘉祐五年の原刻本と思って驚喜したのであるが、やはり南宋紹興年間の刊本であった。欠画は仁宗の禎・貞字等に止まる。

巻末に嘉祐五年六月の曾公亮らの進呈官銜、富弼らの鏤板頒行の中書劄子官銜がある。ただし、虫損で進呈の曾公亮の名、劄子の日付の十六などの文字はみえない。そのほか冒頭の巻七六（列伝一）首九葉、巻九一首一葉が剝落し、版心の部分が虫損しているものも少くない。また、巻九一の第七葉、巻一〇八の七・八葉、巻一二五の六～八・一〇葉、巻一二六の一～四・六～一二・一五・一六葉、巻一三二の一二～一四葉、巻二二一の一一・一三葉、巻二二二上の八葉は原欠葉らしく、単辺無界の印刷紙（白紙）が補入されている。ただし、このうちには静嘉堂本に原刻葉が存するものもある。

一部に朱引・朱圏点が付されているほか、ごく部分的に墨筆

訓点も施され、宋人の手によるものと推察されている。また、巻二一末（第一六冊末）と巻末官銜の末の欄外に「上杉安房守藤原憲実寄進」の墨書がある。上杉三代の寄進本に唐書があったことは、従来まったく知られていなかったが、長沢氏がこれを発見し、足利学校に寄進されたものである。[17] 巻一〇三首（第三冊首）はじめ一七箇所に、最小のもので四・一×〇・九チセンの長方型の印記らしいものの切取跡があり、足利学校の小型印があったものかと思われるが、周易王弼注の慶長写本、論語集解の江戸初写本などに「一代庠主睦子」が捺したかといわれる「足利学校」の小型長方印[18]は、わずかにこれをはみだしそうである。

4　梅沢記念館蔵本

唐書零本（存巻七一下）　〔南宋紹興七年〕刊　一冊

改装後補茶色表紙（二七・五×一九・五チセン）、裏打補修。全四九葉。左右双辺（二一×一四・二チセン）、毎半葉一四行、行二五字、注文小字双行。版心白口、「唐書宰相世系表十一下　（葉数）（刻工名）」。上象尾に字数なく、刻工は順に

王震　王介　銭盛　王成　李敏　周富　李謀
王端　衛祥　史復　毛易

の一一人である。

首尾に「金沢文庫」墨印（外郭七・六×一・八チセン）が捺されている。表紙見返しに「駿河御譲　金沢本／唐書宰相表　一冊」と墨書された貼紙があるが、駿河御譲本の寛永の目録の初に「唐書宰相世系表　一冊　金沢文庫旧蔵　宋版」と録され、行方の知れなかったといわれるもの[19]が、おそらくこれであろう。「後本」印はない。

梅沢本はときに版心の部分が欠損しているが、この巻は静嘉堂にも原刻本が完存していて、右の刻工のほかに第三一・三二葉に王益の名があるものの、匡郭の傷などの箇所が一致して、両本が同版であることをものがたる。ただ、先にも触れたが、第五葉第一〇行の末字を梅沢本は墨釘とし、静嘉堂本がここに「居」字を入木してかえって誤りを復活させたのは、南宋前期に修補されたものであろう。

5　北京図書館蔵本

中国版刻図録図版六六所掲の唐書は、「宋紹興刻宋元遞修本呉興」とあるように、このいわゆる嘉祐刊本を早く紹興刊とみなしたもので、北京図書館に現蔵されるものと思われる。その書影から、これは百納本二十四史の新唐書の静嘉堂本の欠巻部分の補配に用いられたもので、その巻次から北平図書館善本書目に「存一三〇巻　宋刻元印本」と著録されるものと推定されるが、北京図書館善本書目にはみえない。百納本にはその一部二六巻余りが影印されているにすぎず、しかも影印本による判断ながら、紹興の原刻葉の残存は少く、ほぼ版刻図録にいうように南宋前期・同中期・元中期の遞修を経ているとみうけられる。いまは不本意ながら百納本に頼らざるをえないので、あらためて第四節にとりあげる。

三　〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本

1　静嘉堂文庫蔵本

巻六八・六九、一〇一・一〇二、一三五・一三六の六巻三冊で、いわゆる嘉祐刊本の欠巻の一部に補配されたものである。嘉祐本より小型（二四×一五㌢）のため、金鑲玉装とされている。左右双辺（一九・四×一二・五㌢）、有界、毎半葉一〇行、毎行一九字。版心線黒口、「唐方鎮表幾　（葉数）」又は「唐書列伝幾　（葉数）」、双魚尾で、字数と刻工名は入っていない。字様はやや右上りの整った建刊本の体で、欠画は必ずしも厳格ではないが、玄驚炅恒貞禎徵懲慎敦燉郭の各字に行われている。印記は「毛／褒」「華／伯」（陰）が巻一〇二首に、「宋本」（堕円）「御史／振宜／之印」が一〇二首、「季振宜／蔵書」（陰）が一三五首に、「汪印／士鐘」「閻源／真賞」が各冊首にある。

これはつぎの嘉業堂旧蔵、中央図書館現蔵本と同版で、南宋中期建安魏仲立宅刊本と認められる。巻六八・六九は両者にともに現存し、百納本の唐書にもこの版本が用いられているが、右の汪士鐘の蔵印がみえないから、この静嘉堂本に拠ったのではない。

2　中央図書館蔵本

唐書残本（存一九五巻）　〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本

（うち補写一三巻）　六七冊

本	39下		
	46		
	70		
刊	70～	下	
	14～	15～	
宋	14～	39～	
	5	40～	
		86～	
	77		
	70		
	110		
	140		
	112		
	122		
		計	128
巻			巻

本	1		
	25		
	78		
	87		
	103		
	199		
	203		
写	1		
	121		
	130～	1	
	139～	2	
	190～		
	205～		
計			21
補			巻
欠			巻
計			32
			巻

艶出代赭色表紙（二五・四×一五・五㌢）、金鑲玉装。首の唐書目録巻上末に、「建安魏仲立宅刊行／収書賢士伏幸詳鑒」の双行木記がある。首題は「本紀第一」、七字を抵して「唐書一」、次行は三格弱を抵して「翰林学士兼龍図閣学士朝散大夫給事中制誥充／史館脩撰判秘閣臣欧陽　脩　奉　勅撰」。左右双辺（一九・二×一二・五㌢）、有界、毎半葉一〇行、毎行一九字、注文小字双行。版心は線黒口、「唐己幾」「唐書紀幾」「唐書礼楽志幾」「唐礼楽志幾」のように種々に題し、双魚尾で、その下方に葉数が入り、字数と刻工名はないが、稀に上象尾に字数をみることがある。欠画は郭・廓字までで、馴字には及ばない。巻末に、「嘉祐五年六月二十四日／進呈」の曾公亮ら八人の銜名と「嘉祐五年六月二十六日准　中書劄子奉／聖旨下杭州鏤板頒行」の富弼ら八人の銜名がある。巻二一六の第二〇～二二葉に版心粗黒口の元の覆刻本を思わせるものがあるが、他は木記のとおり建安魏仲立宅刊本であろう。

蔵印は多く、「項子京／家珍蔵」「項氏万巻／堂図籍記」、「季印／振宜」、「蘇斎」、「汪印／士鐘」（陰）「閻源／真賞」「平陽汪氏／蔵書印」「平江汪／憲奎秋／甫印記」（陰）「憲／奎」（陰）

「秋／甫」、「劉印／承翰」(陰)「承幹／心印」(陰)「翰／怡」「劉氏／翰怡」「承翰／鈐記」「嘉業堂」「翰怡／玩賞」「御／賜／抗／心希古」「希古楼」とある。

すなわち嘉業堂旧蔵本であり、嘉業堂善本書影に、目録上の首尾、巻一首の三葉が掲げられ、魏仲立宅刊の木記も示されている。その目録に存一八八巻とあるのは理由がわからないが、国立中央図書館善本書目・同宋本図録が存一九三巻とするのは、巻七〇、七一のように下巻だけ存するものの数えかたによるものであろう。ただし、両書が掲げる欠巻のなかに、七一上(志一一上)が脱落、二一六・二一七(伝一四一・一四二)が誤載されている。

百納本の新唐書にこの巻六八・六九の二巻だけが静嘉堂本をさしおいて影印されており、張跋にその旨が触れてある。しかし、巻六九末にあるはずの「蘇斎」の印はみえない。

3　北京図書館蔵本

北京図書館に巻二七下・二八(志一七下・一八)の二巻一冊を蔵する。これは常熟瞿氏の旧蔵本で、鉄琴銅剣楼宋本書影所掲の巻二七下の首に、瞿氏の蔵書印のほかに「在々処々／有神物／護持」(陰)「毛／褒」「華／伯」(陰)の諸印がみえるから、汲古閣旧蔵であったことが明らかで、この方が静嘉堂補配本の僚巻であった可能性がある。

また、繆荃孫の藝風蔵書記巻四に「新唐書二百二十五巻」の一〇行一九字本を著録し、

目後有牌子云、建安魏仲立宅刊行士大夫幸詳察之書両行。是南宋閩本。惟英宗以上諱闕、維謹英宗以下不避、従北宋本出也。収蔵有項氏万巻堂図籍印朱文長方印、毛褒華父連珠小印、在在処処有神物護持白文方印、毎巻有汪士鐘白文・閲源真賞朱文両印。汲古閣旧装。藝芸書舎宋元書目内有此書。

という。しかし、木記の後半の文字がまったく異り、欠画が嘉祐刊本と同じとは信じがたいし、蔵書印にいたっては、静嘉堂補配本と毛・汪氏印で、中央図書館本と項・汪氏印で、北京図書館本と毛氏印でと、各本とそれぞれにつながるのはあまりに網羅的にすぎる。

4　〔元中期〕覆刻本

この南宋中期建安魏仲立宅刊本と行款がまったく同じで、版心上象尾に大小字数、下象尾に刻工名が入って、欠画が著しく減ったものが、宋刊本と称して各所に蔵されるが、これは元中期の天暦二年(一三二九)に右本を覆刻したものである。

静嘉堂に二二五巻四八冊、大垣市立図書館に存一八八巻六五冊があり、宝礼堂宋本書録に二二五巻一〇〇冊と著録され、旧京書影には二二五巻、「旧帰安姚氏書、見蔵北平図書館」として書影二葉(二四六・二四七)が掲げられている。

静嘉堂本、大垣図書館本、旧京書影の北平本には、いわゆる嘉祐刊本や建安魏仲立宅刊本と同じく、巻首に曾公亮の上表、巻末に進呈および杭州鏤板頒行の中書劄子と官銜があり(静嘉

堂本は一部補写または欠)、宝礼堂本はこれを欠くらしく記すところがない。また、大垣本と宝礼堂本は明宣徳九、十年の補修を経ている。いずれも建安魏仲立宅刊の木記はなく、巻一首葉の版心下象尾の刻工名のところに「己巳冬謙徳刊」とある己巳が、元の天暦二年に相当するものである。

唐書二二五巻　元天暦二年覆南宋中期建安魏仲立宅刊本
四八冊　　静嘉堂文庫蔵

後補金切箔散青色表紙(二四・七×一四・九センチ)、襯装。首の曾公亮の進新唐書表と唐書目録巻上の首九葉は補写。左右双辺(一九×一二・三センチ)。一〇行・一九字。版心白口、「(大小字数)唐本紀幾　(葉数)(刻工名)」。刻工はつぎに掲げるようにほとんど姓を記さず、単字のものが多いが、巻一首葉にだけ、「己巳冬謙徳刊」とある。一部に耳格をもつ。

3三　子　子文　子明　山　弓　4中　予　仇　天　支　文
王　王君粋　王愛之　王栄　5可　正　玄　用　曰　6仲
希　汝　汝善　江　7亨　伯　君　君美　君粋　呂　志
成　甫　秀　秀実　8具　明　技　注　青　9英　英玉
茂　茂卿　范興　美　10徐　徐文　祐　高　11卿　国用
国賓　崔　埜　浄　清　清甫　祥　12善　曾　華　華甫
13愛之　程元　遠　14寿　実　栄　粋　賓　15劉　広　徳
徳成　徳謙　16興　静　17応　謙

静嘉堂所蔵の建安魏仲立宅刊本の六巻と較べると、版心を除いて行款をまったく同じくし、覆刻の関係にあることをものがたる。巻末に同じく二つの官銜があるが、尾一葉は欠落して校対官一名の銜名で終っている。ほかにもまま欠葉があり、補写葉もある。朱筆句点が全巻にわたって施されている。蔵印は「石／林」「家宰／之章」「啓／南」(陰)「臣陸／樹声」(陰)「帰安陸／樹声叔／桐之印」等。

唐書残本(欠巻一一～一九・四二～四七・四九～五六・六一～六六・八七～九三　存一八八巻)　元天暦二年覆南宋建安魏仲立宅刊・明宣徳九～一〇年修本　六五冊
大垣市立図書館蔵[20]

後補空押亀甲繋唐草文丹表紙(二五・四×一六・七センチ)、裏打補修。進新唐書表を欠き、目録の首二葉は四周双辺の補版。左右双辺(一九・一×一二・三センチ)、一〇行・一九字、版心白口、上象尾に字数、下象尾に刻工名と、ほぼ静嘉堂本に同じい。巻一首葉の己巳の刊記も存。ただし、補刻葉の版心は小黒口、下象尾に「宣徳九年」「宣徳九年知府宋補」「宣徳九年太守宋補」「宣徳九年太守案補」「宣徳十年同知周」との補刊記のあるものがある。一部に欠葉もあるが、補刻葉は全体で一〇〇葉に満たない。巻末には進呈および准中書劄子の官銜がある。「大垣文庫」「大垣／郷校／之印」等の蔵印。

さて、右の刻工を刊年の明らかな元版についてみると、つぎのような結果を得る。すなわち、徳謙をはじめとして子明(李・劉)・君美(江)・徐文・清甫(江)・華甫(丁・呉)がいわゆる元興文署刊資治通鑑[21]に、子明(徐)・王君粋・君美(丁)・英玉(王)

が至治二年（一三二二）福州三山郡学刊の通志[22]に、華甫が泰定元年（一三二四）西湖書院刊の文献通考[23]に、子明・王君粹・王栄・英玉(王)・茂卿・徳成が泰定四年（一三二七）前後の刊刻の十三経注疏[24]に、それぞれ刻工となっている。したがって、「己巳冬徳謙刊」の己巳は天暦二年（一三二九）とするのが妥当であり、この唐書は南宋中期建安魏仲立宅刊本の元天暦二年覆刻本ということになる。

四　百納本二十四史新唐書について

百納本二十四史の新唐書は、静嘉堂蔵のいわゆる北宋嘉祐刊本を主とし、その欠巻を当時の北京図書館蔵本と江安傅氏雙鑑楼蔵本とをもって補って、影印したとされている。さらに巻末の張元済氏の跋によれば、表の巻八・九と目録に呉興劉氏嘉業堂蔵本を用いているという。いま全巻を検すると、静嘉堂本存一六七巻のすべてはこれに用いられておらず、うち二〇巻（ただし四巻は上中下のいずれかのみ）は雙鑑楼本に拠っている。表八・九の嘉業堂本とは南宋中期建安魏仲立宅刊の一〇行本であって、一八〇余巻が存するうち、巻六八・六九（方鎮表八・九）の二巻だけを採り、目録の部分は建刊風ながらこれとは別の一四行本である。そして、北京図書館本は、ところどころに「京師図書館収蔵之印」の印記がみえるところから、いわゆる嘉祐刊本の後修と思われる一四行本であり、雙鑑楼本は傅増湘の蔵園群書題記の記事から一六行本であることが、一見して識別できる。ただし、影印本による判断ではあるが、目録など一四行本の一部にはいわゆる嘉祐刊本とは別本とみざるをえないものがある。百納本の新唐書は、実に五本以上の宋刊本を集成してできあがったということである。

なお、影印の整版の際であろうが、本文や刻工名などに加筆修正を施されたらしい箇所がある。いまそれを確認できるのは原本と対照しうる静嘉堂本を使用の巻に限られるから、そこで触れる。

1　静嘉堂蔵〔紹興七年〕刊〔南宋前期〕修本

北宋嘉祐でなくて南宋紹興の刊本であることになったが、この存一七六巻のうち、百納本の影印に用いられなかった部分がある。

巻五―一三葉　巻八―一一・一二　巻一〇―六　巻二六―一一・一三・一四
巻二九―一二・一三　巻四九上―二　巻五六―五　巻七一上―三・四・一九・二三・二四・三一・三二・三四　巻一一九　巻一二一―六　巻一三九　巻一五一　巻一五四　巻一九一　巻一九三　巻一九七　巻二〇〇　巻二〇一　巻二〇四　巻二〇五　巻二〇六　巻二〇七　巻二一四　巻二一五上下　巻二一六下
巻二二〇　巻二二一上　巻二二二中　巻二二五上

紹興刊本は巻七五下（宰相世系表一五下）の第一五～二九・三八葉が脱落し、版心の葉数はそのまま連続している。百納本は、欠葉を北京図書館蔵本らしい別本で補い、葉数を加筆して訂正している。静嘉堂本の現存の表の部分はすべて紹興の原刻の葉であり、補充された一六葉は元代の補刻葉と思われるから、原本は当初からこの部分を欠き、南宋前期、中期の補刻を

経て元代になって、これが改められたかと推定される。葉数の訂正は巻一にもあり、静嘉堂本はその第二葉を欠葉のように未記入の罫紙を插入して、第三葉以下に続けているが、実は原版の葉数の誤りで欠葉はないから、百納本はこれを一葉づつ繰りあげている。

全巻にわたって相当に詳密に施された李安詩によると思われる朱墨の書入れは、すべて抹消されている。それらは多く本文と界線にかかっていたし、紹興原刻版は板面が磨滅してかなり汚れている葉もあるから、写真整版の際の修正はかなり甚しいといわねばならず、字様は多分に原本の味を失っている。しかしそれでもなお、紹興原刻と補刻の差異はほぼ判断できる。

百納本の編者は張元済氏であったから、本文の校勘に意が用いられ、その一部が巻末の跋やその著の校史随筆に記されているが、先述の巻七五下の欠葉の補訂や、たとえば巻一〇六第一一葉表の末字に「成龍」とあるのを「成就」と訂してあるように、本文にも校訂が施されている。巻八第一一葉裏第二行の二字文の空格は、「粟三月」の三字がつまって「粟旨」のようにみえるのを、修正しようとして消したまま忘れのこしたものらしい。

巻一〇六第一一葉、静嘉堂本は南宋前期の補版。足利本の紹興原版は「成就」と正しい。巻八第一一葉、静嘉堂本は紹興原版（刻工章彦）であるが、百納本はこれとつぎとの二葉に元代の補版（刻工張亨）を用いており、あるいはこの補刻の際に文字不明のため空格になったのかもしれない。

しかし、加筆修正には行きすぎがあって、刻工名や欠画を不当に変えてしまったところがある。刻工名では、巻三―一二葉の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が李、巻二五―八・一二の李敏が李攸というように枚挙に遑がない。そのなかには原本が比較的鮮明なものがあり、また南宋前期の補刻版もあるが、大半は原刻の刻工どうしが取りちがえられたものである。欠画では、巻七一下（宰相世系表一一下）第二葉裏二行と二二葉表六行の「曙」、第二〇葉表三行の「頊」の両字の末画を明らかに欠いており、第四七葉裏七行の「署」字も同様とみえるが、静嘉堂本は原刻版であって欠画していない。この三字は五代英宗と六代神宗の諱であり、写真整版の際に故意に欠画を施したものと思われ、四代仁宗の嘉祐刊本かが問題であるこの本に人を惑わせること甚しいもので、影印本によって欠筆を調査する際の注意を指摘している。

この巻は梅沢記念館にも嘉祐刊本があり、これらの字は欠画していない。なお、第五葉裏一〇行から一一行にかけて「居」字が重複したのを、梅沢本が前字を墨釘とし、静嘉堂本が両字を重出させ、百納本はこの行全体を修正したことは前述した。

2　北京図書館蔵〔紹興七年〕刊〔南宋前期・中期・元〕遞修本

北京図書館蔵本にあたると思われる一四行本は、左右双辺、毎半葉一四行、行二四字内外と、行格はいわゆる嘉祐刊本と同じであり、版心下象尾に静嘉堂本と同一の刻工名がしばしばあ

らわれるが、一部に、版心上象尾に字数を刻し、字様や刻工の一見して後代の修補と思わせる葉も含む。巻一一首、二〇尾、二一首、一〇一首、一七四尾、一七五首に「京師図書館／収蔵之印」の印記がみえ、北京図書館蔵本であったことが確められる。

北平図書館善本書目（一九三三年刊）には、宋刻本の唐書としてつぎの六本が著録されている。

存八巻志一二中下・一四上下　伝一四〇～一四五　宋刻本

存一三〇巻目録表一～一〇下・一四～一五上・一四〇上・一四五～一四七　紀一～一～一〇　志一～三三・三五～三七　伝一七～三四・八一　宋刻元印本

二二五巻　宋刻明印本

二二五巻　宋刻明印本

存一三五巻　志一～一四・一九～二七・四七～五〇　表一～一～一三上　伝七～五六・六八～九五・一～一〇～一～一七～一二二・一二七　～一三二・一三九～一五〇　宋刻明印本

存九二巻　紀一～一～一〇　表一～四八・一～五〇～五・一～七三・一～一二・一～一二四～一二八・一～一四〇～一四一・一四二下～一五〇　志一～一四・一～一五　伝六～一七・四三～七四・七～九一・一～一〇六・五～一～七　宋刻明印本

この北京図書館本で百納本に使用されていると思われる巻・葉はつぎのとおりで、合わせて二六巻余りである。

〔目録上五～一六葉・目録下一～一八葉〕・巻五―一三葉・巻八―一一・一二葉・巻九―三葉・巻一〇―六葉・巻一一～一四・巻二六―一一・一三・一四葉・巻二九―一三葉・巻四九上―二葉・〔巻五六―六葉・巻七一上―一～四・一九・二三・二四・三一・三二・三四葉〕・巻七五下―一五～二九・三八葉・〔巻八九―七葉〕・巻九九・巻一〇一・巻一〇二・〔巻一二二―六〕・巻一五九～一六四・巻一六六～一七四・巻一七六～一七九・巻一八一～一八三・巻一八九

〔　〕のものはおなじ一四行ながら目録などは明らかに字様や欠画の状況が異り、別本と思われるが、北京図書館本に同時に含まれていないとも限らないので、ここにあげた。同じく七一上（表一一上）の一〇葉などは、同版かとみえるが、つぎに掲げる北平図書館善本書目の当該本と思われるものの欠巻部分なので、〔　〕印を付けた。

これらのうち、第二の宋刻元印本存一三〇巻の存巻を通巻で数えると、

目録・巻一～四三・四五～四七・七〇下・七四～七五・九二～一〇九・一五六～二一五上・二二〇～二二二

となり、百納本に使用された部分がほとんどこれに含まれるから、この本を影印に用いたものと推定される。のちに刻工名から考えるように、元印というのも妥当と思われる。

部分的に一葉ないし数葉が用いられた部分は、いずれも静嘉堂本が存する巻であり、写真整版の際の都合で挿入したのであろうが、一巻全体に及んでいる巻は、むろん静嘉堂本の欠巻である。ところが、この二本と行格の異る雙鑑樓本をもって補ったところには、静嘉堂本の存在する巻が二〇巻もあり、これを共通する一三巻も含めて、北京図書館本の存在する巻も二三巻ある。これらの諸巻になぜ静嘉堂本、北京図書館本を用いなかったかはわからない。

さて、この北京図書館本は、現在も北京図書館に収蔵されていると思われるが、その目録には著録されていない。

中国版刻図録図版六六の「唐書　宋紹興刻宋元遞修本」の書影は、巻一〇一（列伝二六）の首半葉であるが、第二、三行下方の京師図書館収蔵印が百納本のものとまったく同じ位置にあり、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相違するものの、これは百納本に修正が施されたのであろう。

しかし、革命後の北京図書館善本書目には、宋刊の唐書は二本が著録されるだけであり、いずれものちに述べるが、一六行の雙鑑楼本存一二四巻三四冊と、常熟瞿氏鉄琴銅剣楼旧蔵、同善本書影収載の建安魏仲立宅刊一〇行本の存二巻一冊とである。

中図版刻図録は、その大半を北京図書館所蔵本から採ったとしており、同館蔵本以外についてはその所在を明記しているから、同館現蔵かと思われるのである。

この北京図書館本の百納本に影印された四〇巻余にみえる刻工は、静嘉堂本のそれを較べておよそつぎの四項に分類されよう。

Ⅰ　紹興刻工と同じもの

4王大介　王成　王昌　5史復　7呉諧　11章中　章彦　13虞集

Ⅱ　南宋前期刻工と同じもの

4王祚　6朱明　7呂昕　李崧　9施珣　施沢　胡寔　10徐用　11章宇　章容　13董昕　董暉　董暘

Ⅲ　そのほかで上象尾に字数のないもの

4王政　王華　王進　王渙　5包端　6朱宥　7余政　余敏　呉祐　呂信　呂祐　李玉三　李伸　李忠　李松　李若用　李時　李益　沈定　沈松　沈珍　沈祚　沈諒　8周彦　金祖　9洪茂　10徐高　徐栄　高彦　11張栄　張説　章宗　陳仁　陳用　陳言　陳英　陳紹先　陳寿　陳学　12董昕　13賈祚　14趙明　15潘亨　鄭春

Ⅳ　上象尾に字数のあるもの

3子成　子英　4太亨　文明　王正　王昌　王明　5占譲　可川　平山　6朱大存　朱仁　朱長二　7李益　求裕　沈貴　谷仲　8周山　周明　林茂叔　青之　金震　9彦徳　茂実　10孫琦　袁子寧　徐永　徐明　高昱　11張成　張亨　許成　許彦明　陳文　12雇恭　14趙良　趙周　趙明　趙秀　15鄭埜　17応子華

ⅠⅡによってこれが静嘉堂本、すなわち〔紹興七年〕刊〔南宋前期〕修本と同版であり、ⅢⅣによってその元代にいたる遞修本であることが明らかであろう。Ⅰの残存はきわめて少く、二六巻余のうちに一〇数葉しか認められない。原本は、この原刻葉もⅡのそれに近い時期の補刻の葉も、おそらく同じように磨滅汚損してきて、両者の区別がつけにくくなっていて、中国版刻図録ではこれが混同されたものと憶測される。

この影印本は加筆修正が多くて字様、刻工名ともにそのままには受けとれないので、版心上象尾の大小字数の刻の有無によ

ってⅢⅣを分けたが、これでごく大まかに宋・元版の区別がつくようである。

Ⅲの刻工をすでに刻工表を掲げた諸書についてみると、思溪版大蔵経に王政・徐高、外台秘要方に李忠・徐高、淳熙ごろ刊の史記に朱宥・余政・呂祐・李益・周彦・高彦、両淮江東転運司刊の史記に王華・陳寿、漢書に王政・洪茂・余敏、眉山七史の北斉書に王華、魏書に潘亨の名を拾える。これらはおそらく南宋前期の刻工で、静嘉堂本・補刻の際と同時のものと推定される。そのほか金祖・陳紹先・鄭春らは両淮江東転運司刊三史や眉山七史の第一次と思われる補刻葉に、占譲・徐明・鄭埜・応子華らはその後の補刻葉にみえるから、それぞれ南宋中期と元代の刻工と考えられるが、まだ正確を期せないので、つぎの北京図書館の中国版刻図録の考証に委ねる。

中国版刻図録がこの唐書を早く紹興刻宋元遞修としたことは前述したが、その解説（第一冊一八ページ）は、

匡高二〇、九厘米、広一四厘米。十四行、行二十三字至二十六字不等。小字行三十二字、三十三字不等。白口、左右雙辺。

と形態を示したあと、巻中の刻工をつぎの三期に分けている。

第一期　南宋初葉浙中良工

董昜　虞集　董昕　章中　施寔　章宇　包端　朱宥　章容　章彦　董暉　李晦　徐高　等

第二期　南宋中葉杭州地区補版工人

王恭　宋琚　金祖　呉志　陳寿　虞裕　曹冠英　虞世栄　邵亨　等

第三期　元代杭州補版工人

徐艾山　鄭埜　雇恭　応子華　任阿伴　徐愛山　蔣仙老等

中国版刻図録の刻工の分類はかなり正確であるが、この第一期については、紹興とつぎの南宋前期の両者を混同している。すなわち董昜・虞集・章中・章彦は紹興原刻の、董昕・章宇・章容・董暉がそれからさほど隔たらない南宋前期の刻工であることは、すでに静嘉堂本に明らかであった。施寔・朱宥・李詢・徐高は静嘉堂本の補版にはあらわれなかったが、朱有と徐高は前述のとおり、施寔はいわゆる淳熙刊の史記に、李詢も両淮江東転運司三史の漢書にみえて、いずれも南宋前期の補刻刻工とみなしうる。包端の名は嘉定三年跋刊の中興館閣録にもあるが、天理図書館蔵の通典に王政・周彦・徐高・陳仁・潘亨ら数人とともに、また越刊八行本の礼記正義などにあらわれるから、中期にかけて活躍したかと思われるものの、この期の人とみてよかろう。ともかく、この第一期はⅠⅡに分つべきである。

第二期では百納本には金祖と陳寿しかみあたらないが、いずれも敦・郭の両字を欠画する南宋中期の刊本にしばしばあらわれる刻工である。刊年の明らかなものには、紹熙三年（一一九二）の礼記正義（八行本・足利学校遺蹟図書館蔵）に王恭・包端・呉志・邵亨がおり、呉志はまた嘉定五年（一二一二）刊の

歴代故事（静嘉堂蔵）や慶元六年（一二〇〇）刊の春秋左伝正義（中国版刻図録）に、邵亨は嘉定一二年刊の渭南文集（同図録）にもいるという。宋琚と呉志はこの期の諸書にもっとも頻繁に登場する刻工であり、他のものもほとんどこの二人と組合ってみられるのである。

第三期も百納本と共通するのは鄭埜と雇恭であるが、この二人と子華とあって姓を欠く刻工とが文献通考にいる。徐艾山らその他のものも元版に珍しくない。

以上によって、この唐書は紹興七年ごろ刊、南宋前期・同中期・元中期の遞修本と認めて誤りないと思われる。

3　〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本

第三節で述べたとおり、巻六八・六九（方鎮表七・八）の二巻だけが用いられている。行款、字様ともにいわゆる嘉祐刊本と大いに異るが、表であることと同じ大きさに縮印されたためにさほどめだたない。この二巻は静嘉堂、中央図書館（嘉業堂本）の双方に存し、張跋によって後者を採ったものとされているが、巻六九末にあるはずの「蘇斎」印がみえなくて確認できない。

4　〔南宋中期 建安〕刊一四行本

北京図書館本の中に〔　〕をつけて含めたもののうち、目録上第五～一六葉、下第一～一八葉、巻二一第六葉、巻五六第六葉、巻八九第七葉、巻一二一第六葉は、左右双辺、一四行、二五字内外、版心白口、単魚尾、字数なしと、目録下の首題なども含めて、行款は紹興刊本とほとんど一致するが、字様がやや肉太で右上りという建刊本の風を帯び、欠画がかなり厳格で南宋中期の敦・燉・廓の諸字に及び、刻工名は雕られていない。

北京本と異版であることは明らかであり、目録以外はほぼ北京図書館本の欠巻の部分であるから、別本をもって補ったものと考えざるをえない。巻五六、八七、一二一の三巻は静嘉堂本に拠っているところで、そのなかの各一葉にこの版が用いられているわけであるが（静嘉堂本には原刻葉が存在する）、各葉の首尾の文字は前後の嘉祐版と接続し、各行の字詰はかならずしも一致しないという、いかにも補刻葉らしい形は示している。目録下の首題三行だけは、静嘉堂の紹興刊本の目録上のそれとまったく同じに合わせてもいる。しかし計三〇数葉にすぎず、影印本のしかもこのような部分で、ほかに首尾題も存しないので、判断の材料はない。

なお、百納本新唐書の張元済氏の跋文には、静嘉堂本の欠巻を北京図書館本と雙鑑楼本で補って、なお巻六八・六九の二巻と目録の五葉が充足されないので、呉興劉氏嘉業堂蔵の南宋建安魏仲立宅刊本を配して、全巻が宋刊本で整えられたという。巻六八・六九はたしかに建刊一〇行本であるが、目録の補配部分は一四行本であり、嘉業堂旧蔵・中央図書館現蔵の建安魏仲立宅刊本は目録も一〇行であって、これと別本であることもたしかである。

5　雙鑑楼旧蔵〔南宋前期 建安〕刊一六行本

江安傅氏雙鑑樓蔵本は、百納本の巻九八・一〇〇・一一九・一三一～一三六・一三九・一五一・一五四・一六五・一七五・一八〇・一八四～一八八・一九一・一九三・一九七・二〇〇・二〇一・二〇四～二〇七・二一四・二一五・二一六下・二二〇・二二一上・二二二中・二二五上の計三六巻に影印されている。有界、毎半葉一六行、毎行二九字で、したがって前述の諸本より小字となり、南宋初期の建刊本に特有な、瘦金体にもう一癖つけたような、一見して字様の異るものである。現在、北京図書館に蔵せられ、北京図書館善本書目に

唐書二百二十五巻（宋欧陽修、宋祁等撰、宋刻本〔巻一百六十三至一百六十四、二百十二至二百十三配明刻本〕三十四冊）傅増湘跋

存一百二十四巻（九十七至二百七、二百十二至二百二十二中、二百二十四下至二百二十五）

と著録されている。すなわち、列伝二二以下、明刊本を除くと存一二〇巻の列伝部分だけの残本である。

傅増湘の跋とは、おそらく蔵園群書題記続集巻一に収載された、つぎに掲げる「北宋小字本唐書跋」であろう。

此宋刊唐書残帙、存巻自列伝二十二起、至一百五十止（其全書総巻為第九十七至二百二十五巻）、中欠一百三十三至三十六・一百四十七下至四十九上、凡得一百二十三巻。半葉十六行、毎行二十九字。白口。左右雙闌。宋諱桓慎字皆不避闕。蓋北宋本也。字体秀勁、筆意在褚顔之間。断為閩中所刻与宋建本之鋒棱峭厲者、迥然不同。北宋尚存古意、不似南宋以後専以精麗為長。此時代刀法之変遷、不廑繕工之有優劣也。余旧蔵百衲本通鑑、其小字十五六行者、与此正同。他如日本官庫所蔵初学記、江南館所蔵晋書、其密行細楷、亦類此。近歳溷芬楼彙印百衲本廿四史、以唐書難得古槧、因仮静嘉堂之陸氏書、摹影以帰。而陸書頗有欠巻、以北平館本補之。仍苦不足。適余在滬肆収得此書、浼張菊翁前輩代為諧価。菊翁因就此中摂取三十六巻、以弥其欠。於是北宋刻唐書、遂有小字合璧本、伝播於世宇、亦書林中一快事也。菊翁付印時、曾取此本、与武英殿本対校。歴挙周処封倫等伝、文字不同、可以正殿本之失者、凡六事。若尽発此百許巻、詳為勘誦、其獲当何如耶。戦禍将発、憂心如焚。何時仮我以優閑之歳月、肆力丹鉛、一償此願乎。丁丑六月初十日、清泉逸叟、識於蔵園之萊娯室。

蔵印有欧陽玄印、宋景濂印、万巻堂印、及宋蘭揮諸印、其流伝之緒、可以考見。別有紫玉玄居宝刻一印、未識何人、竢博攷之。又第八十八・九、一百三十七・八各巻字迹方板、刻工疏率、神気索然、決非原刻。豈宋末坊肆覆雕、抑明代有翻本、取以補入耶。疑莫能明也。沅叔又識。

上海での入手から百納本、校勘にいたるまで詳細にわたるが、傅氏はこれを北宋本と信じ、張元済氏また静嘉堂本よりわずかに二行四、五字多いだけとその相近いことを喜んで（百納本新唐書跋）、百納本には静嘉堂本、北京図書館本の現存する巻についても、ふんだんにこの雙鑑楼本を用いている。すなわ

ち百納本に使用の三六巻のうち静嘉堂本の存するもの二〇巻、北京図書館本は二三巻あり、両本がともに欠けてこの本によらざるをえないのは巻一三一～一三六（列伝五六～六一）の六巻にすぎない。

左右双辺、一六行、二九字、白口と傅跋に明らかであるが、題、版心など概して簡略で、他本との相違がめだつ。巻首の小、大題の次行は「宋祁奉敕撰」とあって撰者の官職を冠せず巻尾の小題にも巻次数だけで伝者の姓を付さないものが過半に及ぶ。版心の題も「唐列幾」のように略し、双魚尾で、字数、刻工名はない。欠画は敬・恒・貞字を除いてはあまり厳格でなく、静嘉堂本と同じく禎字に止まる。張氏は「至高宗止」というが（校史随筆八〇ページ）、構・購・遘字の冉の一画を略した通体字が数例みうけられるものである。

傅氏が北宋本としたのは、この欠画とともに、秀勁にして筆意は褚遂良と顔真卿の間にありという字様によるわけで、氏はこれと同じものとして三本をあげたが、いわゆる建刊本でこれに似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずれも南宋初期建陽坊刊とする図版一五九～一六六の周易注、後漢書注、史記集解索隠、史記集解、晋書、唐書（一四行本）の六本がまさに同系本で、とりわけ図版一六四・一六五の史記集解が近似している。その解説には、書体秀娟（周易注・後漢書注）または娟秀（唐書）、字近瘦金体（周易注・史記集解・晋書）、遒勁有力（晋書）と称せられるが、後漢書に銭塘王叔辺刊の木記が、史記集解索隠に乾道七年（一一七一）建谿蔡夢弼東塾刊の刊記があり、欠画は周易注が慎字、晋書は構字に至るという。後漢書注は慎敦を欠画せず、史記集解は北宋後期と南宋の諱を避けず、唐書（一四行本）は貞字に止まるというのは、この雙鑑楼本の唐書（一六行本）に似るが、いずれにしてもその解説に明言するとおり南宋前期の建刊本であることには疑いの余地がない。なお、この周易注は一九二八年に文求堂で覆刻され、晋書は百納本二十四史に影印されている。（巻四六～五三・八二～一〇〇・載記は別本）また唐書は南京図書館蔵の一四行二四字本で、同じように初学記などに相似ると解説されているが、雙鑑楼本とは別本であり、この後に付言する。

傅氏がこれに類するとした宮内庁書陵部蔵の金沢文庫本の初学記三〇巻一〇冊は、紹興一七年東陽崇川余四十三郎宅の刊である。巻頭の初学記序の末に、「東陽崇川余四十三郎宅／今将監本写作大字校正雕開／並无訛謬収書　賢士幸詳／鑒焉紹興丁卯季冬日謹題」の四行の木記がある。本文は巻一が毎半葉一二行・行約二二字、巻二以下が一三行・約二四字・、雙鑑楼本唐書よりやや大字ということになろうが、たしかに字様が似て同系本とみられる。ただし、各巻ともはじめは字体が整っているが、後半はしだいに粗雑となり、全巻のうちでも後に行くほどこれがひどく、一見して元刊本を思わせるところもある。

京都大学人文科学研究所蔵の後漢書一二〇巻二〇冊（有欠）もこの期の建刊本であろう。これも、巻一は毎半葉一三行・行

約二四字、巻二以下が一四行・約二六字と行款を異にし、さらに巻中の所々に一五行・約二七字の葉があり、巻の末葉には一一行・一八字、一二行・二〇字のところもある。ただし、文字の調子は全巻を通じていて、中国版刻図録所掲の一連の南宋前期の建刊本とまったく同系のものである。欠画も桓字に止まる。そして、巻七四上、八七（列伝六四上・七七）の各第三・四葉に同じ建安風ながらやや肉太の、唐書でいえば百納本の目録に用いられたものや、魏仲立宅刊本などの字様に似た異版が挿入されていて、これは南宋中期以後の補版かと思われる。なおこの後漢書は、中国版刻図録図版一六〇の後漢書王叔辺刊本とは、その書影のある巻一首は、ともに一三行でほとんど行格を同じくし、字様もかなり似ているが、明らかに別本である。

以上のようなわけで、雙鑑楼本の唐書は、百納本二十四史の影印本によるだけで原本を実見していないが、傅氏のいうような北宋本ではあるまいが、南宋初～中期の建安刊本であろうと推定される。なお、傅跋のとおり、「雪苑宋氏蘭／揮蔵書記」「緯蕭／草堂書記」「宋鈎」「蘭揮」、「萬巻堂／図籍章」、「紫玉／玄居／宝刻」等の諸印がみえる。

盆山書影（民国一八年南京国学図書館刊）にこれと同版の巻一六四（列伝八九）首葉の書影が掲載されていて、「汪印／士鐘」「閬源／真賞」の印がみえる。解題に、「全書一千六百七十葉、版匡営造尺六寸・寛八寸四分（一八・二×一三・五センチ）」とある。江南図書館善本書目（清宣統中刊）、江蘇省立国学図書館図書総目（民国二四・二五年刊）巻九に、唐書二百二十五巻

嘉祐小字本　汪氏藝芸書舎蔵書　三十冊

などと著録されるものであろう。莫友芝の宋元旧本書経眼録の唐書宋本の項にも「毎半葉十六行・行二十九字。汪閬源氏旧蔵、今帰銭塘丁氏。毎冊首有汪士鐘印・閬源真賞二印。」とある。解題は丁丙の善本書室蔵書志の記事を引いていて、「毎葉三十行、行二十五字」というのもそのまま移録している。行数はいずれにしても誤りながら、これではむしろつぎに述べる南京図書館現蔵本に近い。すなわち、

善本書室蔵書志云、是書曾公亮進書表及目録已佚、巻末列「二十一帝本紀一十篇一十巻、十三志五十篇五十六巻、三表十五篇二十二巻、列伝一百五十篇一百六十巻、録一巻」。毎葉三十行、行二十五字。版心窄狹、幾不能容。首行大題亦在下。仁宗以上諱匡胤恒禎、及嫌名殷敬鏡貞等字皆欠筆、而不及英宗以下。殆嘉祐時所鏤版也。謹按天禄琳琅著録、是書称行密字精、結構精厳、与此正同、誠秘笈也。

とあるものである。丁志のこの前の部分に記された、巻首に曾公亮の銜名を冠するというのも、進書表と目録が失われていては存在しないはずで、いささか矛盾と誤謬がめだつ。江蘇省立国学図書館がみずから盆山書影を編して丁志を引くのであるから、これが汪氏の藝芸書舎宋元本書目の宋版書目の 新唐書 小字本二百五十巻であり、丁氏の八千巻楼書目に「新唐書　二百

二十五巻　北宋刊本」と著録されるもので、丁氏の書屋から当時の江南図書館に収められた諸書の一であることにはまちがいあるまい。とすると、つぎの一四行本の中国版刻図録の解説も誤解していることになるが、盎山書影の解題もいささか不明確である。

6　南京図書館蔵〔南宋前期　建安〕刊一四行本

中国版刻図録図版一六六所掲のもので、南京図書館蔵、その解説の全文はつぎのとおりである。

匡高一九・三厘米、広一三・二厘米。十四行、行二十四字。注文雙行、行二十九字。白口、左右雙辺。字体娟秀、版式刀法与晋書、周易注、初学記等書相似、純係南宋初年建本風格。宋諱欠筆至貞字、知拠北宋嘉祐監本翻版。丁氏善本書室蔵書志謂此書為北宋嘉祐刻本、絶非事実。

書影は巻四三上（地理志三三上）の首半葉で、晋書と初学記に似るというのは雙鑑楼本の傅跋と共通するが、一六行の雙鑑楼本より大字で、行格が同じか近いだけに、同図録所載のそのほかの南宋前期建安刊の諸本や、京都大学人文科学研究所の後漢書などとも似、まさにその風格があるかにみえる。初行の小題、大題の順はいずれとも同じであるが、次行は八字下げて「欧陽修奉敕撰」とのみあり、その官職はおろか王朝名さえ冠していない。版心は不鮮明であるが、いたって簡略のようである。同じ一四行の静嘉堂本のこの書影の箇所は原刻葉であるが、字詰は異っており、いわゆる嘉祐刊本と覆刻の関係にはないい。

丁氏善本書室蔵書志云々というところをみると、これが南京図書館蔵本であるし、この唐書も丁氏旧蔵本であったかと思われる。汪氏藝芸書舎蔵書の宋版書目には、この地理志三三を存する新唐書が、大字本一を含めてなお三本著録されているが、八千巻楼書目には、唐書の宋刊本は北宋刊本と称するものが一本著録されるだけである。前の盎山書影所掲本がこの著録本であれば、こちらはそうではなくなるが、この辺の事情は定かではない。この建刊一四行本は百納本唐書に用いられたわけではないが、雙鑑楼本に関連して付言した。

以上　縷々　述べてきたが、要するに、かねて北宋嘉祐五年の原刊本とされてきた唐書が、実は南宋紹興七年ごろの刊本であったということである。この紹興刊本は、足利学校遺蹟図書館と梅沢記念館に原刻本が、静嘉堂文庫に南宋前期修本が、北京図書館に南宋前期・同中期・元遞修本がある。

宋刊新唐書にはほかに建安坊刻と思われるものが三種あって、南宋前期刊と推定される一六行本が北京図書館（雙鑑楼旧蔵）の、同じく一四行本が南京図書館の、南宋中期魏仲立宅刊一〇行本が中央図書館（嘉業堂旧蔵）、静嘉堂文庫、北京図書館（鉄琴銅剣楼旧蔵）の所蔵となっている。この一〇行本には元代の覆刻本がある。さらに未確認ながら、南宋中期刊一四行本の存在が予想される。

百納本二十四史の新唐書は、静嘉堂文庫蔵の紹興刊南宋前期修本を主としているが、この後修の北京図書館本、建刊の一六行本と一〇行本、そして一四行本と実に五本を用いており、いかにも百納本ながら、その選択や過度の修正ぶりから、利用には注意を要する場合がある。

註

一

(1) 以上については、羅香林・唐書源流考上（国立中山大学文史学研究所月刊二―五・一九三四年）の一 修撰考、二 史臣考に詳細な記述がある。

二

(2) 長沢規矩也編・足利学校善本図録 五六・五七ページ（足利学校遺蹟図書館後援会・一九七三年）。

(3) 景徳伝燈録は四部叢刊三編子部に影印されたもので、常熟瞿氏鉄琴銅剣楼蔵本となっている。現在は北京図書館の所蔵らしく、その善本書目（中華書局・一九五九）巻五に

景徳伝燈録三十巻西来年表一巻

宋釈道原撰　宋刻本〔巻一、西来年表配另一宋刻本　巻十至十二配宋紹興四年釈思鑒刻本　巻二至三配清抄本〕　十冊

とあるものがこれであろう。別本補配、補写の巻次が一致するからである。

ここには四種以上の諸本が取合わされて錯綜するので、以下、北京図書館善本書目の称呼を仮に用いることにするが、主体をなす宋刻本は、巻四～九・一三～三〇の計二四巻で、ただ巻一八の一部に元の至正二五年刊本を含んでいる。各巻首に「景徳伝燈録巻第幾」と題し、毎半葉一三行、毎行二一～二五字、注文小字双行。左右双辺で、「匡高二十二公分 寛十六公分」と記されている。版心は白口、「伝燈録幾　（葉数）（刻工名）」、単魚尾で、字数はない。欠画はさほど厳格でないが、匡・竟・境・鏡に止って、貞・禎・曙・署・樹・竪は欠かない。刻工はその大部分を右の章中・章立・章彦・董昜の四人が占め、ほかに呉莫と徐義の名が散見される。

呉莫は巻五～九のわずか一三葉だけで、章中ら四人は常に数葉づつ連続するのに、呉莫のは散発的であり、字様も四人に似るとはいうもののやや劣って、補版かと思わせるものがある。徐義は四五葉あり、続く場合も珍しくないが、巻一三以降のほぼ後半に偏在し、全巻に遍くあらわれる四人の量にははるかに及ばないし、字様からも呉莫に準ずるかにみえる。しかし、徐義の名は後に述べる思溪円覚蔵経の刻工のなかにあらわれるので、章中らと同時代の者と考えざるをえない。

序、西来年表、巻一は另一宋刻本ということであるが、これも一三行、二三～二四字（年表は二八行）、版心が白口であるものの、版心は相違して「伝第一」と題

し、双魚尾、字数と刻工名が入っておらず、貞字は欠画して樹字は欠いていない。おそらく宋刊の別本であろうが、つぎの元刊本から考えられるように、宋刻本と覆刻の関係にはあるまいと推定される。巻二・三の清代の補写も、この本に拠って行なわれたと思われる。

巻一八（第二～八・一一～一八葉）の元版は、やはり一三行・二三字であるが、版心が線黒口、上象尾に字数が入り、一葉だけだが下象尾に「子寧刊」と刻工名がある。これは大東急記念文庫に所蔵の

至正乙巳比丘宝生募縁重刊／板留太白名山祇桓精舎流通

至正乙巳比丘宝募縁／刊於太白山祇桓庵流通

の双行木記をもつ、すなわち元至正二五年（一三六五）刊本三〇巻一五冊と同版であり、その「四明蔣子寧刊」などの刻工名とも合致する。大東急記念文庫本は、左右双辺（二一・七×一五・二センチ）、他に王允元、公挙の刻工名があり、各巻末に助縁僧の名や金額が刻され、また全巻に室町期の朱墨の訓点や書入れが施されており、一部の補写もこの期に行なわれている。

ところでこの元至正刊本は、四部叢刊本の主体をなす宋刻本とは行格を同じくせず、另一宋刻本の序・西来年表・巻一、そして清抄の巻二・三とほとんど一致するのである。なお、元版では延祐三年（一三一六）湖州幽禅菴刊本の存在が知られているが、国立中央図書館金元本図録（図一二五）によれば、左右双辺、板匡高二二公分、寛一五・八公分、一三行・二三～二六字、版心線黒口で字数、刻工名が記され、双魚尾がみえる。この元延祐刊本が中間に位置して、另一宋刻本の系統が覆刻を重ねていったのではないかと推測される。

巻一〇～一二に補配の三巻は、北京図書館善本書目では宋紹興四年釈思鑒刻本とされているが、やや小字で毎半葉一五行、毎行二七～二八、字版心は白口で、下象尾に刻工名があり、そのなかの孫彦は紹興刊の両淮転運司本の漢書（静嘉堂蔵本）、後漢書（百納本影印本）にもみえる名である。これは、後に詳述するが、唐書の静嘉堂本の補刻の刻工と同世代ということになる。欠画は一三行の宋刻本よりやや進んで、署・樹・竪に及んでいる。影印本からとうてい定かなことはいえないが、一見したところでは、字様も宋刻本の方が古く感じられる。それは静嘉堂本唐書の原刻補刻の関係に相当するのであるから、むしろ当然であろう。しかし、この宋刻本を一一世紀中葉の嘉祐ごろの刊とする証拠はなく、この四人も北宋刊本の刻工としてはあらわれない。なお、一五行本の刻工名を列挙しておく。

丁拱　毛昌　方祥　方祐　王進　洪昌　洪悦　施端
孫彦　張学　陳才　陳亢　陳文　蔡忠　蔡政

北京図書館善本書目がこの一五行本を紹興四年釈思鑒刊本というのは、同年の劉棐の景徳伝燈録後序に、

伝燈録鏤行旧矣。兵興以来、其版灰飛。慕心宗者、患無其書。僧思鑒姜人也。……広募浄信、復鏤其板。……台之寧海邑民周氏嘆曰、吾地有大梨木、閱三世矣。……当刊此録耶。遂捨以枏版、且邀鑒即其家、僦工而之刻。……

とあることによるものと思われる。四部叢刊本にはこの後序がないが、北京図書館善本書目にはこの版本が三本著録されていて、そのうちの一本が清抄本三巻を含む完本で巻三〇を備えているから、これに付刻されているのであろう。この一五行本は刻工からも南宋前期の刊本であることには疑いがないが、後序は元版にも付刻されているし、一五行本にあるとしても必ずしもこのときの刊とは限らない。むしろ、章中ら四人の刻工によって主に雕られた宋刻本の方が、実は北宋嘉祐年間の刻ではなくて、紹興四年刊本としてよりふさわしいであろうことが、以下の新唐書の考察を通じて明らかにされるはずである。

（4）外台秘要方四〇巻　唐李寿撰

〔南宋前期〕刊　四二冊　静嘉堂文庫蔵

左右双辺（二〇・一×二三・六センチ）、有界、毎半葉一三行、毎行二三～二四字、注文小字双行三〇字。版心白口、「外台方幾」（葉数）（刻工名）。補刻は全くなく、刻工は

2丁圭　丁珪　3弓成　4方彦成　王介　王安　王成　6朱明*　江通　7余全　余青　余程　呉江　呉邵　李忠　李昇　李昱　李碩　阮于　8周皓　林俊　9俞昌　施蘊　10徐侃　徐政　徐杲　徐昇　徐彦　徐高　徐顔　時明　11婁謹　張永　章楷　陳文　陳茂*　陳浩　12黄季常　13楊広　葉邦　葉明　董明*　董昕　14趙宗　15楼謹　鄭英　17応権

欠画はかなり厳格であるが、医書という性格から避諱すべき文字が少く、もっとも降るのが完字で、構字はみあたらず、慎字は頻出するが全く欠いていない。巻一・九・一七・二三末に

朝奉郎提挙薬局兼太医令医学博士臣裴宗元校正

と校正の、各巻末に左のいずれか一行の校勘の銜名がある。

右従事郎充両浙東路提挙茶塩司韓辦公事趙子孟校勘

右迪功郎充両浙東路提挙茶塩司韓辦公事張寔校勘

巻末には皇祐三年（一〇五一）の校対進呈の上言と「熙寧二年（一〇六九）五月二日准　中書劄子奉／聖旨鏤版施行」の富弼らの官銜がある。しかし、中国版刻図録も指摘しているように（図七五・七六、解題二〇六一）、紹興九年紹興府刊の毛詩正義（杏雨書屋蔵、影印本・東方文化叢書八）、それに同年臨安府刊の漢官儀と文粋に、この外台秘要方と同じ刻工があわせて九人以上もいるところから、また慎字を避けないことから、南宋前期、おそらくは紹興年

間の官刊本であろうと思われる。そうであるとすると、唐書に原刻、補刻とも同名の刻工が各三人いることが大きな問題になる。

なお、宮内庁書陵部に同版の残本一一巻一一冊がある（存巻三・六・九・一一・二一・二一～二三・二五・二八）。中国版刻図録所掲の北京図書館蔵本は、同館の善本書目によれば、巻二一～二三・三三の四巻を欠き、三十六冊、そのうち宋紹興両浙東路茶塩司刻本は巻二～六の五巻で、他は明抄本三〇巻、清抄本二巻となっている。中央図書館（北平）にも巻一・二の二巻二冊を蔵する。

（5）文選六〇巻　五臣并李善注　〔南宋初期〕明州刊　二一冊　足利学校遺蹟図書館蔵

宮内庁書陵部蔵本の巻末に右迪功郎明州司法参軍兼監盧欽の紹興二八年の補刊記があるが、すべて原刻の足利本にはそれがない。左右双辺（二二・三×一四・七センチ）、有界、毎半葉一〇行、毎行二一～三字、注文小字双行三〇字内外。版心白口「文選幾　（葉数）（刻工名）」。刻工名は、

[4]方成　毛諒　毛諫　王乙　王申　王因
王伸　王雄　[6]江政　江通　[7]余尚　呉正
呉圭　呉戎　呉珪　呉詢　宋道　阮宗
[8]祁富　[9]俞忠　施章　施瑞　洪先　洪茂
胡正　[10]徐宗　徐彦　高起　[11]張由　張清
張逢　張謹　郭正　郭政　陳迎　陳然
[12]黄大　黄暉　黄覚　[13]葉明　葉達　葛珍
葛珎　董明*　[15]劉仲　劉信　蔡至道　[16]駱昇
駱晟

で、この本はかねて紹熙ごろの補修があるといわれたが、紹興中刊本であって、南宋初期に活躍した人たちとみてさしつかえない。欠画は構・慤字まで行われている。金沢文庫印、北条氏の虎印が捺され、北条氏政から第九代庠主の九華に与えられた本である。

（6）いわゆる眉山七史は、三朝本と称されるように、補修を受けつつ明代まで板木が残存したために、伝本は少くない。しかし、原刻葉をある程度残し、その刻工名を確認できるのはせいぜい元修本までであって、その存在は稀であり、その多くが百納本二十四史の各史の影印に用いられている。なお、以下の解題のなかで、刊修の時期の推定を、南宋だけは三期に分つが、元代は細分しなかった。ここで問題となるのが南宋であることと、元の刻工についてはなお調査を要するからである。

宋書一〇〇巻　梁沈約撰　〔南宋前期〕刊〔南宋中期・元〕～明嘉靖遞修　五四冊　中央図書館蔵

左右双辺（二二・六×一七・三センチ）、有界、毎半葉九行、毎行一八字。版心、宋版は線黒口、「宋書紀（志・伝）幾（葉数）（刻工名）」、字数と魚尾を刻しない。

巻一～五・一一～一三・一五～七四の六八巻四〇冊は、

毎冊首尾に明の「礼部官書」の大型印を捺し、元修元印と思われる善本であり、他は弘治四年、嘉靖七～一〇年の補刊記をもつ葉を含む、明代にいたる遞修本である。前者にも原刻葉はわずかしか残っておらず、その刻工と推定されるものは、これと同版の次掲本とあわせて、つぎの一五人を数えるだけである。

4王友　王志　王廷　王庚　°王昌　°王祖
王智　王諒　史忠　5田召　6朱通　任欽
7余心　余貴　宋全

欠画は原刻葉では桓字まで行われている。呉興劉氏嘉業堂旧蔵。百納本二十四史の宋書はこの元修本を主とし、次掲本などをもって補っている。

宋書残本（存巻四～一二・一四～二四・二七・二八・三〇・三一・三九・四一～四八・五二～六五・七五七九・八二・九三～九六　計五八巻）〔南宋前期〕刊〔同中期～元〕遞修　三一冊　中央図書館（北平）蔵

粘葉装。前掲本のうちの「礼部官書」印のある本と同版であろう。毎冊首に「晋府／書画／之印」、尾に「義真／堂図／書印」がある。

梁書残本（存巻一～六・一一～二一・二六～四一・四六～四八・五一～五四　計四〇巻）　唐姚思廉撰〔南宋前期〕刊〔南宋中期～元〕遞修　八冊　中央図書館（北平）蔵

粘葉装。左右双辺（二一・八×一七・五センチ）、九行・一八字。版心も宋書に同じ。原刻刻工はなお問題があるが、

4王千　王才　王生　王志　王廷　王昇
°王昌　°王祖　王欽　王堪　5田力　田立
田永　6朱太　朱右　朱言　朱通　任欽
任達　任顕　7余恭　余貴　11張林　張禹
張善　13楊丈　楊和

がそうであると思われ、その欠画は慎字に及んでいる。百納本に使用。

陳書三六巻　唐姚思廉撰　〔南宋前期〕刊〔南宋中期～元〕遞修　一六冊　静嘉堂文庫蔵

左右双辺（二一・九×一七・五センチ）、九行・一八字、版心は宋書などと同じ。原刻葉の残存は後掲の三本より少く、元代にも数回にわたって補修を重ねたか、あるいはそれが明初に及んだことを示すが、それらの詳細は後考に俟つとして、ここには四本を含めての原刻刻工名をあげる。

4王才　王丙　王生　°王圭　王利和　王廷
王昇　°王昌　王能　°王祖　王華　王賓
5田力　田立　田永　史忠　6朱太　朱右
朱言　朱通　任欽　7余貴　呉明　10袁明
11張仁　張禹　張善　陳立　陳智　12程昇
馮舎　黄文　13楊和　15潘正

欠画は慎字に及ぶ。百納本には、たぶん首尾完好という

ことでこの静嘉堂本が底本とされたことになっているが、晋府図書や京師図書館の印が数箇所にみえるように、次掲のうちの前二本をもしばしば用い、とくにこの本に失われた原刻葉が存するところは、ほとんどその宋版に差しかえている。すなわち、百納本の陳書には現存の原刻葉がほぼ網羅されているといってよい。

陳書残本（存巻一～五・六・八～一〇・一七～二二・二四～三六　計二五巻）　七冊

陳書零本（存巻一七～二一・三一～三三計八巻）二冊

陳書零本（存巻五・七・八～一〇　計五巻）　一冊

〔南宋前期〕刊〔南宋中期～元〕遞修

中央図書館(北平)蔵

前二本は粘葉装、後は包背装。静嘉堂本より原刻葉の残存がやや多い。

北斉書残本（存巻三五～五〇　計一六巻）　唐李百薬撰　〔南宋前期〕刊〔南宋中期～元〕遞修　五冊

中央図書館(北平)蔵

左右双辺（二三・一×一七・四ｾﾝﾁ）、有界、毎半葉九行、毎行一八字。版心は宋書等と同じく、線黒口、「北斉列伝幾（葉数）（刻工名）」と題する。原刻刻工は

3下開　4王才　王太　王世華　王生　王昇　°王昌　王能　°王祖　王華　5田力　田立　6任昌　任韋　任欽　7余貴　9洪新　10袁民　11張仁　張善　15潘正　蔡邠

であり、その欠画は慎字に至る。「橋氏／家蔵」、「京師図書／館収蔵之印」印。

百納本二十四史の北斉書の一部に、全巻が用いられている。

魏書一一四巻（欠巻四〇～五九　存九四巻）　北斉魏収撰　〔南宋初期〕刊〔南宋中期～元末期〕遞修　六〇冊

中央図書館蔵

左右双辺（二二・四×一七・七ｾﾝﾁ）。有界、毎半葉九行、毎行一八字。版心線黒口、一部に白口もある。原刻葉は版の磨滅が著しいわりに、かなり残っている。

3万六　4王川　王才　王大方　王亢　王升　王冲　王全　王周　王信　王能　°王真　王欽　王堪　王智　王華　王道　王賓　壬有　史志　史忠　5田下　田召　田永　6朱言　朱通　任巳　任玉真　任亨　任宗　任欽　7余貴　宋全　宋彦　家宗　10袁民　11張仁　張国　張善　陳立　12単亨　程升　馮会　黄文　13楊和　14趙旦　15潘正　潘亨　蔡中

が原刻の刻工であろう。欠画は構・慎まで。補刻はほとんど明初には及んでいないと思われるが、あらためて精査したい。呉興劉氏嘉業堂旧蔵。百納本の魏書は北京図書館、

江安傅氏雙鑑樓、嘉業堂、滴芬樓の各蔵本を集めて影印したとされるが、この本の毎冊首に捺された「呉興劉氏嘉／業堂蔵書記」印が二〇箇所にみえる。

（7）　史記残本（存巻八～一五・一八～二六・二八～三〇・三八～一一六　計九九巻）　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　〔南宋淳熙三年〕刊〔同八年・南宋後期〕修　二四冊　静嘉堂文庫蔵

左右双辺（一九・一×一三・九センチ）、有界、毎半葉一二行、毎行二五字内外、注文小字双行。原刻と思われる葉の版心は白口、「史記幾　（葉数）（刻工名）」。その欠画は慎字に及んでいる。首に淳熙八年の耿秉の補修の、尾に同三年（一一七六）の張杆の原刊の跋があるが、いずれも補写で黄丕烈の筆になるという。中国版刻図録図版一二九・一三〇所掲の楊氏海源閣四経四史之斎旧蔵・北京図書館現蔵の存六三巻の書影（目録首・巻七首各半葉）はちょうど欠巻のところであるが、これと比較して同版とみなしてまちがいないと思われる。ただし、北京図書館本は淳熙三年の原刻本で、同八年の補刻も入っていないという。後修を経た静嘉堂本ではこの区別はしがたいから、左に掲げる刻工名はこの両者を含めたものである。

4王中　王椿　5丘文　丘臻　包彦　6朱宥
7余政　余珍　呉仲　呂祐　宋昌　宋端
李元　李良　李珍　李師順　李益　李祐
李憲　李証　8周彦　昌彦　9施中　施正
施昌　施政*　施琢　施寔　洪坦　洪新
洪源　胡寔　10師順　徐忠　徐立　徐栄
郎松　高秀　高俊　高彦　11張明　章中
章*宇　章林　章琢　章梓　章椿　陳昌
陳説　陸椿　13董暉*　15劉文　劉彦中

（8）　文粋一〇〇巻　宋姚鉉撰　南宋紹興九年臨安府刊　四二冊　北京図書館蔵

中国版刻図録（図版九・一〇、解題八・九ページ）に、「匡高二四・一厘米、広一五・八厘米。十五行、行二十四字至二十七字不等。白口、左右雙辺。宋諱欠筆至構字。巻末有紹興九年臨安府開雕、校勘官・監雕官銜名十一行。刻工呉邵・陳然・牛実・沈紹・朱礼・何全・胡杏・弓成・王允成・王成・銭皐・董明・王受・王因・蔡通・朱祥・阮于・徐真等人、皆紹興初年杭州地区良工。字体古樸、無一補版。欠葉皆顧広圻抄補。黄氏士礼居旧蔵、百宋一廛賦著録。」とあるのによる。図版は巻六首半葉と巻末表半葉（官銜一一行のうち、七行を収める）。ここに挙げられた刻工は一〇〇巻四二冊中のごく一部にしかすぎまいと思われるから、これで二名、また唐書補版の刻工も董明・蔡通と二名の他に額例も少くないと予想され、このように両者が共存することに注目を要する。

（9）　両淮江東転運司三史は、宋の洪邁の容斎続筆巻一四に、

紹興中、分命両淮江東転運司刻三史板。其両漢書内凡欽宗諱並小書四字曰渕聖御名。（周蜀九経）

とあって、宝礼堂宋本書録に著録の史記集解に淮南転運司監雕の官銜があり、これと行格を同じくする漢書、後漢書が欽宗の諱を渕聖御名、高宗のそれを今上御名とするところから、これらがこの三史にあたるとされている。九行一六字と大字本で字様も堂々としており、欠画も相当に厳格であるが、漢書は版心の形式などをやや異にし、また紹興刊本としては欠画が慎字に及ぶことがいささか不審ともいえる。張元済氏は、百納本二十四史後漢書の跋や校史随筆（後漢書）、あるいは涵芬楼燼余書目で、李心伝の朝野雑記を引いたりして、この刊行事業が紹興末年から着手され、較精になされて次の孝宗の代に及んだために、慎字も避けたとみているらしい。史記はまだ実見の機会を得ないが、漢書・後漢書をみると、渕聖御名、今上御名の例は少くはないがやや偏ってあり、それより桓、構字の末画を欠いたものの方が多く、しかもそれには埋木して改められた形跡がある。それは完成が隆興乾道年間に及んだことの証左とも考えられるが、南宋中期の補刻の際に行われたのかもしれず、今上を避諱しないとすれば紹熙以後のことにもなるし、いまはいずれとも断定しがたい。しかし、いずれにしても、ここで問題の一二世紀中葉の南宋前期の刊であることはたしかであろう。この三史についても、再考するつもりである。

史記一三〇巻　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解

〔南宋前期〕淮南路転運司刊〔南宋中期～明初〕遞修

四〇冊　北京図書館蔵

補刻が明初に及ぶとするのは、北京図書館善本書目。南海潘氏宝礼堂旧蔵で、宝礼堂宋本書録著録。以下、この記載するところに従う。左右双辺、毎半葉九行、毎行一六字、注文小字双行二〇～二一字。原刻の版心は白口、単魚尾で、刻工名を刻し、字数がない。巻二〇建元以来侯者年表、巻二六暦書、巻八七李斯列伝、巻九五樊酈滕灌列伝、巻一一〇匈奴列伝、巻一二六滑稽列伝の末葉に「左迪功郎充無為軍軍学教授潘旦校対」「右承直郎充淮南路転運司幹辦公事石蒙正監雕」の二行がある。刻工名は原・補刻に分けて収録されているが、その前者は画順にするとつぎのようになる。

4仇永　王全　王先文　王祐　王景　王華
王寿　王沢　5丘甸　6仲良　仲鑒良　朱明*
7何通　呉佐　呉伸　呉迪　呉煥　宋寔
李秀　李彦　李恂　汪靖　8周永　屈旻
林選　9俞尚　施光　10孫彦　袁俑　袁俊
11張宗　張真　張翼　戚聰旺　曹硪　章旼
陳用　陳伸　陳彦　陳寿　陳徳　陳震
陳権　12彭祥　華再興　閔孝中　13楊安　楊守

楊守道　楊明　楊垓　楊道　楊謹　葉才
葉石　葉青　14翟栄　趙明　15劉章　劉璋
16盧鑑　17謝興　韓仔　18戴祐　魏正　魏成
魏俊　19羅成　21顧玿　顧真

欠画はかなり多いらしく、構・搆・媾・覯・彀・殼字にとどまらず、慎字にいたっている。蔵印は「南京礼部／公書之□」のほか、王世懋、毛氏汲古閣等のものが多数。

中国版刻図録には、上海図書館蔵の「初印精湛、無一補版」という三〇巻（上海図書館善本書目によれば存巻五・六・八～一二・一六・一七・三四～四〇・四八～五四・五六・九九・一〇〇・一〇七～一一〇）が著録されていて、「匡高二二・三厘米、広一七・七厘米」とあり、校対、監雕官の銜名の所在も同じ、刻工名は挙げられていないが、「刻工与建康府江南東路転運司本後漢書、以及当塗・宣城等地刻書多同、宋諱欠筆至構字、間有避慎字者、因推知此書刻版実由南宋初葉南京地区工人担当。」と書かれている。

漢書零本（存巻一下・二・六～一二・二一・二四・二七中・二八上・四八・四九　計一五巻）後漢班固撰　唐顔師古注　〔南宋前期〕刊〔元〕修　八冊

中央図書館（北平）蔵

第一冊（巻一・二、粘葉装）、第二・三冊（巻六～一二）、第四冊以後の三種以上の取合本。第二、三冊は補刻が多く、第七冊（巻二八）、八冊（巻四八・四九）がこれに次ぐ。補修は元代のものが多く、これが二回にわたり、南宋中期にもわずかながら行われていたと思われるが、なお精査を要する。ただし、これら各巻は補修の多少にかかわらず、元末か明初の同時の印本と思われる。後掲の静嘉堂本が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武一〇年前後の土地文書の紙背に印刷されているからである。左右双辺（二二・七×一七・六センチ）、有界、毎半葉九行、毎行一六字、注文小字双行二二字。原刻葉の版心は眉山七史などと同型で、線黒口、「前漢紀（志・伝）幾（葉数）（刻工名）」、字数と魚尾がない。原刻と推定される刻工は、まったく同版とみられる以下の三本を含めてつぎのとおりである。

2丁璋　3上官傳　4方中　毛彦　毛諒　王中
王允成　王永　王永従　王石　王成　王亮
王琢　王茂　王恩　王渙　王徽　王挙
5包政　6朱静　7余坦　余竑　余通　余敏
呉宗　呉興　李文*　李昇　李杲　李俊
李度　李純　李景　李詢　李憲　李懋
沈亨　沈昇　沈昌　沈恭　8卓受　卓宥
周元輔　周用　周常　林芳　林俊　金茂
金華　9施沢*　洪先　洪珍　洪茂　洪新
10孫昇　孫格　孫琦　孫楹　徐侃　徐定
徐坦　徐杲　徐竑　徐茂　徐逵　徐諒

徐顔　11婁謹　崔彦　張圭　張昇　張況
梁文　章宇*　章忠　許茂　許源　陳伸　陳庠　陳真　陳從　陳敏　陳詢　陳説*
陳寿　陳鎮*　12恵道　程恵　13葉克己　董昕
董明　董暉*　15劉仲　劉源　蔡通　蔣勍
20厳定　厳忠

欠画は慎字までで、桓・構の両字も欠き、一方、桓字を「淵聖御名」とする場合がある。この二字は埋木をして修正してあるようにみえ、とくに巻六四下第二六葉、巻六六下第二〇葉の桓は明らかにそうである。はじめ淵聖御名としたものを、のち末画を欠いた桓に改めたものと想像される。

漢書零本（存巻一六～二〇・二四・二五・九四・九五　計九巻）　四冊　中央図書館（北平）蔵
漢書零巻（存巻六五・有欠葉）　一冊　中央図書館蔵
漢書零本（存巻六四～六七上・六九上中　計五巻）　四冊　静嘉堂文庫蔵

後漢書残本（存巻六・九・一〇・一六～一八・二一～二九・三三～三六・三八～五九・六一～六四・六八～七〇・七三～七八・八二下～八五・八八　計六〇巻）　劉宋范曄撰　唐章懐太子賢注　〔南宋前期〕刊〔南宋中期～元〕遞修　一七冊　静嘉堂文庫蔵

後漢書にも路転運司の刊記・銜名がないが、史記の淮南にたいして、江南東路転運司刊本と推定されている。左右双辺（二二・八×一二・五センチ）、有界、毎半葉九行、毎行一六字、注文小字双行二〇字。原刻葉の版心は白口、「後漢帝紀（列伝・書志）幾（葉数）（刻工名）」と題し、単魚尾、上象尾に字数がない。欠画は慎字に至り、桓・構も大半は欠くが、一部に「淵聖御名」「今上御名」とするものがある。漢書と同じく紙背は明洪武年間前半の土地文書で、すなわち明印本である。補修もあるいは明初に及んでいるかもしれず、後掲の百納本の後漢書の底本とされた当時の涵芬楼蔵本よりは一段階進んでいて、原刻葉がはるかに減っている。刻工名は 宋刊本刻工名表（一）の七九に掲げられているが、以下の二本とともに涵芬楼本の欠巻を補う場合もあるから、そこに合わせて掲げる。

後漢書残本（存巻四～八・五八・五九・七四下～七六・八一・八二・八六・八七・志一・二・六～九・一三～一五　計二三巻）　志晋司馬彪撰　梁劉昭注　九冊　中央図書館（北平）蔵

後漢書零本（存巻三三）　一冊　天理図書館蔵

ともに粘葉装。静嘉堂本と補修も同期と思われるが、北平本は印面の汚れがめだち、やや後印であろう。

後漢書一二〇巻　〔南宋前期〕刊〔南宋中期～元初〕遞修（巻一二～一六補写）　四〇冊　北京図書館蔵

上海涵芬楼旧蔵で百納本二十四史の後漢書に影印された

もので、補修は元初に止まり、原刻のままでまったく補刻葉のない巻が四〇余巻もある善本である。補刻も大半の巻は数葉づつにすぎず、これを前掲の三本に較べると、たとえば巻八は全二九葉原刻にたいして北平本は補刻八葉、巻八一は補刻が六対二二という具合であるが、志のはじめの部分には補刻が過半に達するものもある。なお、補写の五巻に補われた北京図書館本は明修本であろう。涵芬楼燼余書録と前掲三本を参照しつつ、原刻葉を識別するとその刻工は左表のようになる。

3于洋△　4王中　王允成　王永　王永從　王石
王仲　王琮　王栄　5丘甸　6刑宣△　朱安明
*朱明　7何通　余仲　呉佐　李允　李用
李秀　李昇　李芳　李彦　李旻△　李恂
李倍　李清　李章　李棠　李椿　李碩
李璋　8卓受　周茂　周清　屈旻△　林仁
林志遠　林芳　林俊　林康　9洪沢　10孫彦
袁佾△　袁俊　11張宗　章攸　章英　章演
章駒　郭惇　陳用　陳至△　陳伸　陳辰
陳彦　陳振　陳從　陳敏　陳震　陳興
陳鎮　12程用△　華定　楊垓　楊程△　15劉仲
劉康△　劉清　劉寔△

右下に△印のあるものは、原刻らしいが例が少くていささか疑問を残すものである。涵芬楼燼余書録は龐汝升・宋琚・馬祖ら南宋中期の補刻刻工をも初刻に含めている。

(10)　周易注疏一三巻　魏王弼　晋韓康伯注　唐孔穎達疏
〔南宋前期〕刊　一三冊　足利学校遺蹟図書館蔵

左右双辺（二一・七×一五・七センチ）、有界、毎半葉八行、毎行一九字、注文小字双行。版心白口、「易注疏幾」（葉数）（刻工名）。各冊尾に南宋端平元年・二年の陸子遹の識語があり、首の眉上に「足利学校公用」、尾に「上杉右京亮藤原憲忠寄進」と墨書されている。欠画は構・媾等の字にいたり、慎字は避けない。いわゆる越刊八行本でも補刻のないことで有名であるが、刻工は

2丁珪　丁璋　4毛昌　王琢　6*朱明　7李秀
李棠　李碩　10孫中　徐亮　徐茂　高旼
11張祥　梁文　梁済　許明　陳明　陳錫
21顧忠

(11)　漢官儀三巻　宋劉攽撰　南宋紹興九年臨安府刊
一冊　北京図書館蔵

中国版刻図録所載。「匡高二四厘米、広一五・七厘米。十行、行十七字、十八字不等。注文雙行、行二十二字。白口、左右雙辺。……巻末有紹興九年三月臨安府雕印一行。……」と解題されている（八ページ）。図版（七・八）は巻上首半葉と巻末の葉とであるが、続古逸叢書一八に全巻が影印されており、これによって検すると、刻工は

7宋道　李石　10徐真　11陳才　13愈忠　*董明

15 潘俊　20 鐘遠

であり、欠画は桓・完字に及び、ただ一字ある溝字は一画を欠く俗字体である。

(12) 景宋嘉定本中興館閣録（善本叢書第一輯・中央図書館・一九七一年）。

(13) このいわゆる刻蔵題記は、小野玄妙・仏教経典総論　大蔵経概説（仏書解説大辞典・一九三六年）、同・宋代思溪円覚禅院及同法宝資福寺新雕二大蔵経雑考（日華仏教研究会年報第三年・一九三八年）、小川貫弌・思溪版大蔵経私考（龍谷史壇一九・一九三七年）、同・思溪円覚禅院と思溪版大蔵経の問題（龍谷学報三二四・一九三九年）、文化財保護委員会・長滝寺宋版一切経現存目録（一九六六年）等によれば、

大東急記念文庫蔵　号字函　大般若波羅蜜多経巻四九四
南　禅　寺　蔵　命　観所縁縁論
長滝寺・岩谷寺蔵　涇　撰集百縁経巻五

の各巻末に前者が、また、これと内容はほとんど変らないが字句にやや異同のある後者のものが、

南　禅　寺　蔵　履字函　長阿含経巻二二
喜　多　院　蔵　連　阿毘達磨識身足論巻六
同　枝　阿毘達磨界身足論巻上
同　真　阿毘達磨倶舎論巻三

に、どちらか不明であるが

中　尊　寺　蔵　書・経　法苑珠林巻五一・七六

にもあるという。両者ともに、全一四行が二折の一紙に収められていて、経の本文とは別刻しておいて、右の諸経論の巻末に貼りたしたものらしい。

南禅寺の観所縁縁論は従来よく紹介されてきたものであるが、大蔵経（大蔵会編・百華苑刊・一九六四年）五二ﾍﾟｰの写真によれば、観所縁縁論の尾題にすぐ続けて題記が貼り継がれているようで、両者の字様は極似している。大谷大学図書館蔵の無想思塵論・観所縁縁論二経同巻の巻末第五葉（刻工葛方）は五折あって、第四折に観所縁縁論の尾題があり、このところは南禅寺のものの写真とまったく同版とみうけられるが、そのあと第五折は余白であって、題記がなくて終り、それが付着していた形迹もない。大谷大学の思溪版には、ほかにもこの題記は一切ないようである。一方、大東急記念文庫の大般若波羅蜜多経巻四九四末の題記は観所縁縁論のものとまったく同版であり、かつ大般若波羅蜜多経の本文はずっと固い調子のそれと字様の異るものであって、題記はこの経に続けて雕られたものではない。なお、この僚巻の巻四九一首の眉上には、横書の「円覚蔵司自紙板」の墨印があり、大谷本の紙背の折目には「法宝蔵司□」の朱印があって、これらについては別に一考したいが、ともに南宋初のいわゆる前思溪版であることに違いはない。

(14) 南宋的雕版印刷（文物・一九六二年一期）一六ﾍﾟｰ。

(15) (紹興六年八月丙辰) 直徽閣両浙西路提点刑獄公事宇文時中、陞直宝文閣、知湖州。

(建炎以来繫年要録巻一〇四)

(同八年春正月甲午) 左中大中参知政事陳与義、為資政殿学士、特遷左太中大夫、知湖州。仍加恩。与義本張浚所引、故称疾而有是命、与義在政府未満歳也。…直宝文閣知湖州宇文時中、移知遂寧府、従所請也。

(建炎以来繫年要録巻一一八)

宇文時中の伝記は不明のところが多いが、史堯弼の宇文龍図時中哀詞并引(蓮峯集巻一〇)などによれば、粋中、虚中の弟で、北宋末から南宋初にかけて活躍し、左中大夫直龍図閣 封華陽県男 知潼川に至ったという。宇文氏は成都華陽の人、次兄の虚中は金との外交に腐心し、建炎二年(一一二八)金に使したまま抑留され、ついに金に仕えて終った(宋史巻三七一、金史巻七九)。その生年が元豊二年(一〇七九)であって、紹興六年には五八才になっているが、時中はそれより数歳は若いことになる。紹興七年、ときの青年宰相張浚が失謀誤国として二〇の罪をあげて弾劾されたが、その第一七に妻の父の宇文時中ら親戚を不当に任用したと非難されている(建炎以来繫年要録巻一一四)。時中の女が張浚の後妻となり、宋史巻四二九道学伝三に朱熹と伝を並べる張栻を生んだものである(朱熹・少師保信軍節度使魏国公致仕贈太保張公行状・晦庵先生朱文公文集巻九五)。やはり同時代人の鄧椿の画記には時中(宇文季蒙龍図)の名がしばしばみえ、徽宗の水墨花禽図、王維の雪山図などを蔵する美術愛好家であったと伝える。

(16) 中国版刻図録図版七四、および宿白氏前掲論文 例表一。

(17) 長沢規矩也・足利学校蔵書の集散について(上・補)(書誌学新六号・一九六六年)。

(18) 川瀬一馬・足利学校の研究(講談社・一九四五年)二一五ページ。印影は前掲 足利学校善本図録 四(周易)・四八(論語義疏)・一〇五(王状元集百家註分類東坡先生詩)ページにみえる。

(19) 川瀬一馬・駿河御譲本の研究(書誌学三―四・一九三四年、日本書誌学之研究 所収)。

(20) 大垣市立図書館漢籍目録付善本解題(同館・一九七二年)。

(21) 資治通鑑二九四巻 通鑑釈文弁誤一二巻 宋司馬光奉勅編 元胡三省音註弁誤 〔元〕刊〔元〕修 二八六冊 静嘉堂文庫蔵

首の王磐の「興文署新刊資治通鑑序」と司馬光の「資治通鑑序」は補写であるが、版心の小題・葉数・刻工名も記されている。つぎに容斎随筆の一節が写され、胡三省の「新註資治通鑑序」から刻本に入る。双辺(二一一×一四チセン)、有界、毎半葉一〇行、毎行二〇字、注文小字双行。版心は小黒口「(大小字数)通鑑幾 (葉数)(刻工名)」。

刻工は、

2丁士与　丁師禹　丁実□　刁文　刁文質　4王子興
王仁甫　王仲仁　王伯玉　王智夫　王曾夫　5丘文粲
付子勝　付仁　付文徳　付友実　付智高　付賓
6任青甫　朱子行　江公　江公評　江天其　江四如
江仲安　江仲寮　江仲績　江吉甫　江安民　江成甫
江伯高　江伯海　江君吉　江君美　江君寔　江君裕
江志高　江叔度　江青甫　江青卿　江梅溪　江清甫
江実父　江寿卿　7余子共　余子恭　余平父　余仲容
余安斎　余君仲　余君亮　余馬児　余敬仲　余巌仲
呉已　呉升高　呉生老　呉可九　呉可久　呉昭甫
呉進甫　呉華甫　肖子光　李子明　李永員　李光于
李光奕　李伯太　李求□　辰希文　8周季方　周寄周
周第　周継周　9俞慈卩　姚君実　姚祖敬　胡仲昭
胡志卿　胡時中　范以貴　范興宗　10凌善慶　席善珍
徐文　徐文卿　翁文忠　翁禔甫　連季仲　11張希文
張伯興　張君茂　張季祥　張和甫　張叔夷　張明甫
張漢卿　許漢卿　郭信徳　陳七　陳子和　陳子厚
陳子華　陳文甫　陳以敬　陳以徳　陳外秀　陳光甫
陳君仲　12馮永昌　黄子一　黄子通　黄子応　黄升安
黄升貴　黄叔安　黄善卿　黄善敬　黄達夫　黄徳明
13葉文意　葉正卿　葉克明　葉杞宗　葉清甫　葉智和
葛秀甫　虞文甫　虞文斌　虞以徳　虞君賜　虞良卿
虞智文　虞漢臣　詹宗海　詹慶二　15劉二高　劉子仁
劉子明　劉子昭　劉元善　劉允善　劉伯把　劉伯起
劉克明　劉季和　劉義高　劉銓孫　蔡松青　蔡貢甫
蔡興子　鄭七才
3子求　子美　子興　4仁老　午平　天賜　尤八　文四
文忠　文福　文鎮　5世明　以貴　必遇　正卿　永明
6仲仁　仲良　仲貴　仲賢　希孟　7克昭　克敏　伯英
伯寿　君興　君宝　宗卿　宗敬　8叔意　叔彝　9若興
10祖珍　11惟志　12淳卿　善楽　達公　雲海　15徳明　徳閏
徳謙　16興宗

らがいる。ごく一部に元末と思われる補修が行われていて、補刻葉は文字がやや小さく、版心が原版よりやや粗黒口ぎみで、字数と刻工名がない。また、巻一一六～一一九（第一一五・一一六冊）と巻二〇四（第一九一冊）の第五～一九葉とは紙高の七ミリ小さい補刻または覆刻のような別本をもって補配され、巻二〇四の第一～四・二二葉と巻二〇五・二〇六（第一九二冊）は補写である。補配本の刻工のうちには、付智高・余子恭・呉進甫・李永員・葉克明・虞文斌・劉仁甫・君美・松清・文四・仲其・智和・祖珍ら原刻と同じ名がみえるから、同版後印本なのかもしれないが、両本を対照してやや異るところがあり、覆刻版のようにも思える。

これの同版本は比較的多いが、王磐の興文署新刊資治通

鑑序を備えるものは、天禄琳琅書目著録の二〇函一六冊などごく稀のようである。この序に、興文署が良工を召集し、諸経子史の版本を刻して天下に頒布しようとし、その最初の事業として資治通鑑を刊行するといい、興文署の設置が至元二七年（一二九〇）（元史巻一六世祖紀一三）、王磐の死去が同三〇年（元史巻一六〇王磐伝）である。右の刻工には以下の通志などの一三二〇年代の諸刊本と共通するものが少くないから、この序が補写とあるだけに微妙なところで、これを直ちに興文署刊と断定はできない。しかし、刊年がこの三、四〇年の間に絞られることはたしかである。もっとも、王国維は、王盤の致仕が至元二一年までで、胡注の成立が二三年であるから、興文署刊本は無注本であるとしている（元刊本資治通鑑音注跋・観堂集林巻二一）。

(22)　通志二〇〇巻（欠巻五八・五九・九三）　宋鄭樵撰

元至治二年福州三山郡学刊　明成化一〇年　万暦一七年遞修　一一八冊　内閣文庫蔵

首に至治二年（一三二二）三山郡斎における呉繹の序があるが、至治元年の呉繹の疏とそれに続くという（国立中央図書館金元本図録　一四八ページ）「至治二年九月印造」の一行と当塗県主簿袁某らの銜名はなく、つぎの鄭樵の通志総序の初葉は補写。左右双辺（二九×一九・四センチ）。有界九行、毎行二一字、注文小字双行。版心白口「通志三皇紀第一　（葉数）」のように題し、上象尾に大小字数、下象尾に刻工名を刻する。明代の補版は主に成化の版が大黒口、万暦版が白口で、上象尾に「成化十年／吏部重刊」（陰刻）、「萬暦十七年刊」の補刊年記の入ったものがある。なお刻工名の頭に「至大二年」「至大二年福建」「至大己酉」のように年代と地名が刻されているものもある。ただし至大二年は至治二年より一三年早い。元版にはかなり磨滅したものもあるが、補版は比較的少い。元の刻工にはつぎのようなものがいる。

2丁君美　丁容　丁荘　丁鎮道　4王一　王乙
王二　王十二　王大手　王仁甫　王君粋　王初
王英　王素老　王智夫　王台　王福　5史経
付四　付安定　付定　付長　付員　付崇
6危子　危祖　危梓　朱一　朱乙　朱銓孫
江二　江三　江士堅　江六甫　江太　江元三
江弐　江成　江住　江伯寿　江泰　江崇
江衍　江復亨　江善　江意　江福　7伯太
伯奴　伯玉　伯先　何鳴皐　余二介　余子真
余伏亨　余復亨　余陳　余寿　呉友山　呉方午
呉正　呉正乙　呉君宝　呉章　呉欽　呉徳
呉宝　呂二　呂公慈　呂文正　呂文振　呂仏
呂慈　宋一　李嬭奴　阮付才　8官子忠　官忠
官春　官椿　9兪平十　姚達　姚欒　姚鶩

施八　施公賜　施午　施文意　施明甫　施意
施德甫　胡生子　范子需　范子琇　范壬九　范升高
范四　范仲美　范禾甫　范明　范和甫　范雪
10徐子明　徐明　徐德潤　翁留　連子青　連子美
連君礼　連竜　高青甫　高得明　高德明　11崔一宸
崔一観　張林　張叔彝　張奉　張明　張明甫
張陳甫　梁太初　章進宝　覚官　覚霍　陳丁六
陳十　陳十才　陳士安　陳子禾　陳子和　陳六
陳介夫　陳太　陳文卿　陳五乙　陳必遇　陳仲山
陳君仲　陳和　陳和孫　陳若虚　陳祐甫　陳恵
陳祥恵　陳順　陳順甫　陳照　陳実父　陸全
12曾崇甫　游二　游四　童世禄　童蒙　馮昌
黄五　黄午　黄必大　黄章　黄善　黄善楽
黄順　黄寿　黄福　黄德　黄德明　黄旺
黄応五　13葉元起　葉世禄　葉臣仲　葉辛一　葉辛乙
葉辛六　葉崇　葉崇甫　葛秀甫　虞乙　虞君恵
虞晋　虞恵　詹仲輝　詹復亨　詹輝　14熊已
熊興甫　15劉九　劉子全　劉子周　劉仁仲　劉元叟
劉四九　劉正卿　劉季夫　劉記　劉照　潘矮
蔡公許　蔡君甫　蔡牧　蔡勝　16盧岩　盧晋
盧福(芦福・炉福)　盧陳福　賴元甫　鮑陳　17応子通
謝友直　18魏子敬　魏平叔　魏德夫　20厳子敏

内閣文庫にはもう一本、清の蔣琦旧蔵の通志があり、二〇〇巻、一二四冊。巻一～六は補写で、補刻が進み、万曆一八・二三・二四・四五・四六・四七年、崇禎元年の補刊記が版心に入っている。首の呉繹の序と疏、鄭樵の総序、総目録も補写で、やはり至治二年九月印造の文字と官銜はない。元の刻工は前本とほとんど変りがない。

(23)　文献通考三四八巻　元馬端臨撰　元泰定元年西湖書院刊　後至元五年余謙修〔明〕再修　一二〇冊　静嘉堂文庫蔵

張鏡容旧蔵本で李待問、黄丕烈らの読識語がある。文献通考目録末に至元又五年（一三三九）の江浙等処儒学提挙余謙の叙記があって、泰定五年（一三二四）刊のこの本の修補のことを述べている。左右双辺（二四・四×一八・三ｾﾝﾁ）。有界、毎半葉一三行、毎行二六字、注文小字双行。版心は線黒口、「（大小字数）文献通考巻幾（葉数）（刻工名）」。ただし明代の補刻が相当に多く、粗黒口で、字数・刻工名を欠くものもある。巻一首葉は中央図書館の金元本図録所掲（図七七）のものと明らかに異って明版であり、この明初修本よりさらに後修本であることをものがたる。もはや泰定の原刻、至元の補刻の区別はつけがたく、つぎの刻工もこの両者を含めており、それも中央図書館本よりかなり減っている。

子華　3山番(潘)　4元吉　元亨　文甫　王子仁
6朱明　汝敬　7君仲　李寿　秀卿　10翁子和

11陳義　12華甫　雇恭　13詹仲亨　15劉子和　鄭埜
17薛子旦

（24）しばしば宋刊本と称されてきたいわゆる正徳一〇行本注疏であって、これが元刊本であることは長沢規矩也氏の十行本注疏考（書誌学三―六・一九三四年）に説かれたが、静嘉堂文庫蔵の完本二〇〇冊に拠って、論語註疏解経巻一首葉の版心下象尾に「泰定四年程瑞卿」、巻三首葉の版心中央に「泰定丁卯」（刻工王英玉）と刊記が離られていることが明らかにされ、またその考証に、原刻刻工がこの唐書や前掲の資治通鑑と対比されている。正徳の補刻年記は大半が切りとられているが、一二年のものがわずかに残存し、ほかに六年、一六年のものなどのあることが報告されている。孝経註疏と爾雅註疏は明版で、この二書以外にあらわれる元代の刻工はつぎのとおりである。

2七才(鄭)　3子仁　子明　子興　子応　4仁甫
天易　天錫　文仲　文甫　文粲　王君粋
王君錫　王英玉　王国祐　王栄　5以清　以善
以徳　丘文　古月(胡)正卿　6仲明　仲高
安卿(余)希孟　朱文　江住郎7伯玉　伯寿(陳)
伯彦　住郎(江)余中　余安卿　君美　君錫(王)
君祐　君善　呂善　8和甫(劉)季和　季孟
宗文　明景梅9昭甫　胡古月　茂卿　英玉(王)
范興　10宸　時中　11国祐(王)崔徳甫　張徳
清甫　進秀　陳百寿　陳伯寿12善卿　善慶
善応　智夫　智文　程瑞卿　童卿　3瑞卿(程)
葉徳遠　葛二　14寿甫(蔡)漢臣　禔甫　詹応祥
15劉知甫　劉徳元　徳山　徳元(劉)徳成　徳甫(崔)
徳誠　徳遠(葉)徳謙　蔡寿甫　鄭七才16興宗
17応祥(詹)弥高　21鉄筆

これら宋元刊本の調査にあたって、貴重書の閲覧をお許しいただいた静嘉堂文庫はじめ各図書館・文庫のご厚意に心からお礼を申しあげる。

追記

この稿の校正中に再び大谷大学図書館で思溪円覚蔵経の調査を許され、さらに一〇〇余函約七〇〇帖からあらたに五〇名の刻工名を検出した。このうちに唐書原刻にもみえる王震がいるので、三九三～四頁の刻工表の末尾の余白へ補入した。三九三頁上段の思溪版の形態に関してであるが比較的前の函の経の一部に例外的に経題・葉数・刻工名が第二または第三の折目に露出したものもある。しかし大半を占める継目に隠れるものと刻工は共通していて、別版ではない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるもの、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補し、これに言及する余白がない。